May 1898
no. 465

明治三十一年五月十日

女學雜誌

第四百六十五號

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●相切れ候とも御斷無之間は依然發送致すべく候間爲念申置候也●

第四百六十五號目次

◎社說
無學の過
永久の身代長年の壽命

◎家庭
無用の用
女房役　おうそた

◎講義
靑少年の感化事業と出獄人保護事業

◎文藝
不器用の上手　きよくほ
上田宗固の松　長井金風

◎隨感
春の夜◎月光の裳◎我が風光◎可憐の子◎只だ自ら棄てざる耳◎神聖◎痛ノ牝鷄

◎史談
史論片々　非華
(堯舜無爲の政治◎平重盛◎建武中興◎足利新田兩氏◎楠正成◎楠正儀)

◎雜錄
有感の記　鷗村
(かなしき妻◎哀れなる子◎姑の心◎人の子)
少女子よ◎醒より出でし身のなくば(新体詩)　花影子
日記拔萃　泡鳴子

◎時文
農家の細君◎新小說

◎片々◎時報

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や簡易實際を專にし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學教界に對する吾議多年の主義を發表するもの。

◎單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるものあらば其望に應ずべし

●女學雜誌定價表●

前金	壹冊 定價 金拾錢 半年前金 金壹圓拾錢 一年前金 金貳圓 (內國無郵税)	代金は凡べて前金の事◎前金切れ候とも御斷無之間は引續き發送するとも可有之事
廣告料	一行 一回(廿七字詰) 前金拾錢 同 三回以上 一割引 同 六回以上 二割引	
送金	爲替は東京本郷駒込郵便支局に宛て小爲替にすべし(郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割増を添ふべし	

明治廿七年二月十九日內務省許可
明治三十一年五月十九日印刷
明治三十一年五月二十日發行

東京府北豐島郡巢鴨村字庚申塚六百六十番地
發行兼編輯者　巖本善治

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十六番地
印刷者　島保藏

東京府北豐島郡巢鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所　女雜誌社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
(電話本局十九番)

社告

櫻井成明譯 **腓立比物語** 正價金二十八錢 郵税金六錢

橫山雅男著 **婚姻論** 正價金十二錢 郵税金四錢

若松賤子譯 **小公子** 正價金三十五錢 郵税金八錢

巖本善治著 **吾黨の女子教育** 正價金五錢 郵税金二錢

布川靜淵、故小此木秀野合著 **俳諧史傳** 正價金二十七錢 郵税金四錢

故鈴木弘恭述 **百人一首講義** 正價金二十八錢 郵税金四錢

同 **文法口授** 正價金十二錢 郵税金二錢

●前號 四月二十五日發行第四百六十四號要目●

誠實即卓識＝逆風孤叫＝新島襄及福澤諭吉＝可憐楚々の愛嬌＝某女學校の卒業生に告ぐ＝女囚の狀態＝アンナ、ゴルドン＝學窓の回顧＝敎士獨嘯＝隨感數則＝情死の哀(二)＝故鄕の夢

●●●●●第二回豫約廣告●●●●●

塙保己一編纂
訂正再翻刻

羣書類從

四六形洋裝全十八册
紙數二萬一千餘頁
定價金參拾圓

第一輯 神祇部 既刊 以下
第二輯帝王部、(補任部)○第三輯(系譜部、傳部、官職部、律令部)○第四輯(公事部)○第五輯(裝束部、文筆部、消息部)○第六、七、八輯(和歌部)○第九輯(連歌部)○第十輯(物語部、日記部、紀行部)○第十一輯(管絃部、蹴鞠部、鷹部、遊戲部、飲食部)○第十二輯(合戰部)○第十三輯(武家部)○第十四輯(釋家部)○第十五、十六、十七輯(雜部)○外ニ總目錄一册、本年十月完結の豫定

右は曩日豫約者を募りたるに其の數**二千名**の多きに達し尚續々申込有之も既に豫約期限を經過せしゆゑ一時御斷り致し置きたる處右豫約漏れ諸君の御便宜を計り今般第一輯出來に際し左の方法に依り**第二回の豫約に應ずべし**

一 本年五月十五日迄に一時入金のもの　金拾六圓
一 本年五月十五日迄及十月三十日の二回に九圓宛入金のもの　金拾八圓
但し東京市外は別に遞送料を申受く

見本御入用の方は郵劵二錢投ぜらるべし

明治三十一年四月

東京市京橋區彌左衛門町七番地
(電話番號本局千二百二十三番)
合名會社 **經濟雜誌社**

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

故若松賤子英文集

巖本嘉志子

一冊正價金六十錢
郵稅金六錢

小公子の譯者故若松賤子の英文述作に於けるや筆路頗る流麗なるを以て稱せらる。今此書は即ち女史が英文廿一篇を收めたるものにして、加ふるに女史の師友ブース氏及其他內外知友記する處の女史の小傳追憶記等を以てし、また女史の肖像を揭く。蓋し以て內外家庭の團欒の友となすべく、又以て尋常中學高等女學校等の英語教科書となすに良好なりとす。

發賣所　東京巢鴨村庚申塚　女學雜誌社

『巖本嘉志子』に對する批評

故若松女史が紀念にと、女史が英文の遺稿を集めて、其內外の知己及び良人巖本氏の發行せしものなり。その文字の簡明にして好く選ばれたる、高雅にして然かもなづまざる、流麗清新の文まことに Queen's English の純なるものに恥ぢず。神田氏、頭本氏など今の英文士として知られたる人々の筆に成るものより、遙に自然にして生々したる心地す。否本國の女流と雖も、此文を成すもの蓋し多しとするに足るべきか。孤女學院を訪ふの紀の最初のあたり、少しく日本人が詩的形容の流弊に失したる憾みあれど、皇后陛下、皇太子殿下の御事を記し奉るの文字などめでたく覺ゆ。こし方行末と題せる終りの一文、又一つの書簡に函館難船の事を記せるもの最も筆力を見る。女子教育と基督新教とは最も深く女史が心に印せし如くに思はる。この有爲にして清新の思想を抱くの女史、早く故人となりてこの遺集をなす、これを惜しむもの、豈に其知己朋友のみならんや。

（文學界第四十七號「明治二十九年十一月三十日」）

東京裁縫女學校長　渡邊辰五郎先生著

裁縫教授書

全部三冊
定價金一圓
郵稅金八錢

渡邊先生の裁縫に於けるや技術に長じ、理論に精しく、殊に其教授法の巧妙なるに至りては、餘人の企て及ぶ能はざる處あり。此書は即ち其特長の教授法によりて、諸般の裁縫技を親切叮嚀に說明せられたるものなれば主婦は素より女學生も亦裁縫を學ぶに當りて、必ずや坐右此書を備ふるの要あるなり。

大取次　東京巢鴨村庚申塚　女學雜誌社

●切拔通信の要旨

●切拔通信をなすべき概目は農工商業政治法律外交貿易政黨俱樂部教育宗教歷史詩歌運輸交通土木建築鑛業山林美術技藝各人身上に關する事等凡そ諸新聞紙上揭載の作は小說廣告に至るまで其委託に應じ精閱遺漏なく勉めて配達を迅速にして以て愛讀者の便益を期す

東京市京橋區釆女町廿一番地
東京通信社附屬
新聞切拔通信部

●切拔手數料大要

●一己の身上に止まる通信は一ヶ月金貳拾錢とし●一事業又は一事物に止まる通信は一ヶ月金參拾錢より金五拾錢まで●會社又は一團躰の全般に關する通信は壹ヶ月金五拾錢より金壹圓まで●前記の事項と雖ども關係の範圍廣く日々記事の多數なるものは臨機の契約を爲すことあるへし●月數に拘はらず件數にて委託せらるゝものは東京は十件に付金貳拾錢地方は郵稅を併せ金參拾五錢とす尤も細事項は總て號外として件數に算入せす●本社切拔通信規則書御入用の方は御通知次第郵送すへし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第四百六拾五號

明治三十一年五月二十日發兌

社説

無學の罪過

總じて事は齟齬し易きものなれど、赤誠慈愛の思惑と相違ふほど、痛ましきはなかるべし。父、生涯の苦勞に身を詰めて幾何かの身代をつくる、錢厘の微しきも倘ほ粒々の玉の汗を凝したり、豈に、尋常一樣の苦心ならんや。而して、到底の、目的は、子孫に財産を遺し、其の生計を安穩にし、長久に世上の歸服を得せしめんと欲するにあり。慈愛の情感泣すべし。親たる人の用意左こそあらめと推諒せらるゝとなるに、此の用意反つて敵となり、子孫は之が爲めに奮發せず、大率ね家の財産を頼みにして最後の決心を起さず、未だ人生の辛酸を嘗むるに至らずして、早く既に奢侈放埒の誘惑に陷り、先代が汗血の寶を散らして、酒盃浪籍の間に毀つ。事の志と齟齬すると、未だ斯の如く甚しきはあらざるべし。又、母、の其赤兒を護るや、至愛、天下に及ぶもの稀れなり。彼女、時として獨語して曰く、如何なれば斯くは可愛きぞやと。蓋し其の愛情の切なると、吾れ人の同に不思議に感ずるほどにて、世上何等の故障妨碍ありとも、母の慈愛を杜絶し得るものは未だ曾てあらじ。一顰一笑に苦慮するとは、眞に母親の情を言ふ。傍乳の掛念は半時一刻の油斷もなく、深夜、少かの咳の聲にも夢を破る。おつ〳〵安眠の間もある可らず、寒ければ、衣を重ねしめ、暖なれば、直ちに剥ぎ、其の好き好むまゝに遊ばせて、蝶花のながめよりも信切なり。夫れ、其の愛すると斯の如く濃やかなる母より見ば、兒孫七十年の長壽を得るとも倘ほ不足に思はんほどなるに、頻々彼等が天折して、墓畔連りに童兒童女の戒名を見るは何故ぞ。仔細に其の元因を探究すれば、天死の起りは母が余りに之れを大事にせし故にて、所詮は、其の慈愛の濃厚なりし故に歸す。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

何んぞ意はん、之を撫でたる手の反つて之を殺すの手とならんとは。冲々、日夜、其の育愛に心配し、寧ろ其の信切を以て之を倒さんとするは何事ぞ。泫然として母は泣いて曰く、此の兒何んぞ短命なると。左れば之をして短命ならしめたるもの、實は我自己なるとを覺らば、痛苦更らに如何ん。嗚呼、人事の齟齬こゝに至つて絶頂に達す。

吾人、近來屢ば此般の悲慘を目擊し、人間の薄弱と、世事の痛絶なるとに念ひ至りて、未だ曾て嗚咽せずんばあらず。人心、赤誠に熱して寸分の怠りなく、經營苦慮して百方の術、盡さゞるとなきに際し、但だ其の學の足らざると、識の高からざるとに由りて、則はち存外の結果を來す。人世の恨事、何ものか夫れ斯の如き。吾人數たび念じて痛歎禁ぜず。學の講ぜざる可らず、識の磨かざる可らざる所以を感ずるや太だ切なり。蓋し聞け、世上同感の士、何んぞ善く自他講究の道を開きて、かの憐れむべきの至誠に善果幸報あるとを得せしめんとは力めざる。仁士、一切の智を進めて、世人頭腦の明晰を增さしめんとを望むの情や、主として此の所にありて存する歟。

永久の身代、長年の壽命（上）

◎西鄕先生の詩に

幾經辛酸志初堅。丈夫玉碎耻瓦全。我家遺法人知否。
爲子孫不買美田。

之は先生が得意の詩で、又、理想の詩であつたと見えるが、如何にも、平生の見識と鍛錬とが、歷然として現はれて居る。熱腸熱愛の質で、殆んど多恨多情とも言ふべき程の先生が、冷然として兒孫の難儀を看過し、其の窮乏貧困の裏に苦勞するを構はれなかつたは「人は到底逆境の間で練磨せねば成らぬと云ふと」を見拔かれたからの事で、即はち、自分でさへ、幾度か辛酸を經て、夫れで志が初めて堅くなつたのであると云ふ經驗を白狀せられた。此の「初めて堅し」の初の一字が最とも注目すべき所である。夫故、經驗と識見とよりして御覽になれば、子孫の爲に美田を買はぬが即はち親の慈悲で、此の慈悲の爲めには血の涙を揮つても辛棒して鬼になると云ふが、親の眞の本懷ではあるが、扨て目前の情に動くとも亦た多恨の人の一性質で、なか〳〵苦しい所である。西鄕先生は

どのお方でも、隨分此の御苦心はあつたものと見えて、此の詩は實に先生眞面目の敍情詩であつたさうな。且つ餘人に對して曰はれたに、もし吉之助が此の詩の所以に背いたヿを爲たならば、夫こそ言行不一致の男であると責められても申譯がないと言はれた相な。

◎西郷先生程の天稟のお方でさへ、辛酸を經て初めて志が堅くなつたと仰しやる。况んや、尋常平凡の人々に於ては、實地に難儀をせねば世の中が分らず、親しく苦勞したヿでなければ、人の情が分らず、現在、苦心して手に入れたもので無ければ之を重んず可きヿも分らぬが當然で、左なくて自から知るなどと云ふ天才は殆んど凡人の企望すべき所であるまい。左れば、親たるものが、非常の苦心をして其子の爲めに財產を積んでも、たゞ此の財產を讓る許りで、其の苦心の方を讓らなければ、子たるものが之を容易に受つぎて、何の氣もなく亂用するに至るは、當然の事である。尤とも、亂用する丈けの事で、言はゞ集めた財產を散らしたと云ふ丈けに留まれば、まだしもであるが、之よりも更に惡しきと云ふは、彼が世の中を眞面目に考へずして、世渡りを容易きヿに思ひ、

只た浮氣の調子で、大切なる壯年を費やし、フト氣が着いたる頃は、既に双鬢に白髮を見ると云ふやうでは、如何にも殘念なヿである。左すれば、親が初めに無造作に身代を讓つたのが氣の毒で、更に推して考ふれば、徒らに子孫の爲めに財を積んだのが、禍の元となつたのである。左すれば、親の慈悲は反つて慈悲と云へぬ。申さば、其子孫の爲の敵である。」

◎然らば、子孫の爲に財を積むヿは一切惡るいかと言ふに、固より左樣ではない。追々に積んで之を讓るのでなければ、巨大の身代も出來ず、數十代數百年の舊家名家と云ふものも出來ぬ。一身一家は別として、世の中の爲めにも甚はだ惜しむべきヿである。且つや、親が子に寳を讓りたいのは、人間天來の一つの美質で、又、親から讓られたるものは、尤とも大切に、一番にゆかしく思ふが、更に一方の美質であるから、苟しくも文明開化と言つて、世の中を追々に開いて行くには、是非畜積增加せねば成らず、夫には、親ゆづりの仕組で、人の子たるものに渡し、之を大切にするより良法は無いヿである。夫故、子に財産を讓るのが惡るいのでは無い、讓らぬのが惡るいので、今日、世の中通常の讓り方は即はち讓るの

では無い、譲つても直きに失はさせて仕舞ふのである、實は譲らぬも同様である、イヤ夫よりも倘惡るいと言ふ所から、申すので、ツマリ西郷先生の詩も其邊の深意が有のである。左れば、親たるものは、本當に其の財産を譲りなさい。本當に譲るには、其子をして譲り受けるに堪ふるものと成らしめなさい。その堪ふるものとは、即はち、親が苦勞したと同様の苦勞をなし、財産を譲りうけると同時に、此丈けの財産は非常の苦勞から出來たものと云ふとの能く分る丈けの苦勞家でなければ成らぬと言ふのである。即はち、苦勞の經驗と財産とを一處に譲らなければ成らぬ。

◎此の主意を實行する方法としては、色々の工夫もあるとゆゑ、固より一々言ふとは出來ぬ。つまり人々が考へて見れば大抵思案も出るとであるが、先づ第一に言ふべきは、親たるもの自身が左程の苦勞もせず、俗に所云る一攫千金で、投機などの僥倖を以て俄かに得た身代は、大抵、二代とは續かぬものと覺悟せねばならぬ。一攫千金の心は、他日の一擲万金で、山氣が去らぬ以上は、いつかはまた山で仕損じるに相違ない。水は海に歸り、山は山に列なる。投機商の心は如何にも不信切極まるもので、其の腹に眞面目の處が乏しい。つまり辛苦して積み上たもので無いから、自然と其の情合が子供にも移らぬ。子供は又たまうけるとは容易すいものと考へて、決して之を重んじるもので無い。天下の糸平と自から誇つた近世の糸商人は、強いて遺言を迫られた時、重厚として口を開いて曰ふた相な、謹しんで相場師となると勿れと。

◎名家舊家などの能く久しきに續く所以は、主人たるものが財産を自分のものと思はぬ柄である。其の財産は即はち家のもの、先祖傳來の家の寶で、自分は只だ番人の如きもの、攝政關白の如きもの、言はゞ、天下の天下たる其天下を、暫らくお預りして、之を善くして、而して、後に傳へるのであると云ふ、公明正大なる心、堯舜と類を同うした心を以て其の財産を管理するからである。眞や、財は天下の公有であるから、之を私有して己が勝手剛慾に遣はんとするときは、久しからずして之を失ひ、遂に天下に散じて天下に歸つてゆく。之れに反し、たとひ吾一家一人の名義には爲つて居ても、之は天下の實であると勘辨し、自分の世計は自分の力で得したものを以て仕切り、先祖傳來のものには手を付けず、

之は決して私のものでないと覺悟する時は、其の財産が万々年に至るまで遺る。天の清福と云ふものは爭はれぬもので、中々人爲の手段で勝手にすることは出來ぬ。

◎近年澤山の會社が出來て、ややともすれば何百万圓、何千万圓と云ふ大資本を使ふ。扨て、其支配人は如何なる人かと言ふと、一万圓の金さへ自分で作つた經驗は無いと云ふ。之は如何にも怪しからんことで、よくも亦た人が信用して安心して居ることだと思ふことが度々ある。之は一時の流行で、言はば流行を信ずることでも言ふものであらう。此の流行が今や一轉せんとするに際しては、之よりして其の失敗が續々起ることであらう。扨て、人は、一万圓より二万圓、二万圓より三万圓と追々活用の手心が熟するので。之も亦た段々の進歩である初めから分外に重い棒を振廻さうとすれば、つまり之を落すヨりである。身代を讓るにつきても此處の用心が要る。十万圓の身代を讓るに付ては、先づ百圓、千圓、五千圓と、追々に其の振廻し方を實地に練磨させて、而して後に之を讓るやうにせねば成らぬ。之が爲め、初めは百圓、五百圓と、全く損をすることもあらうが、其經驗が土台となつて、つまり

他日の十万圓を善く振廻すやうに成れば、百圓五百圓は安いもので、之は學問の月謝と思はねば成らぬ。親の考では、十万圓の身代を確實なるものに入てさへ置けば、子供の代に成つても大丈夫であらうと思ふことがあらうが、之が即はち危いのである。確實なものに仕て置かねば成らぬ程では、即はち其の子が不確實なのである。之より危いことは無いでは無いか。確實なものに元入して置くのは、其子を危ぶんでするので無く、つまりは教育の爲めと、元より當然の處置でするのでなければ成らぬ。十万圓の身代を安心して讓ることは、此の十万圓を大丈夫振り廻すことの出來る丈の伎倆を同時に讓つて置ねば成らぬ。左あらば、何程、確實な所に元入して置ても直きに變つて仕舞ふ、何の役にも立たぬ。

◎扨て、俄紳士が生にえの品格と、早造りの家風とで、其子の敎化に圖齒千万の形跡を遺すのは、言ふ迄もなく醜いことであるが、石部金吉の堅藏が、律義一遍の勤儉主義で、時勢の變化も知らず、青年の氣象も知らず。六十の禿頭と、紅顔の若い者と情合を一つにしての取扱ひは、存外の珍事を引起すものである。儒者の子に道樂ものが多く、道德家の子に放

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

蕩家の多いのと同じで、無暗に堅い斗りでは、青年男女の詩的趣味に合はぬ。彼等は一生の春の時代で、長望樂天の極樂時代だ。無論、難義をさせて之を敎ふる事は爲ねば成らぬが、又その中に一種悠々たる樂みとする所を得させねば成らず、若いものゝ常として、大目に看過さねば成らぬ所がある。此邊人情の機微を察せずして、飛でも無き風波を起し、金甌無欠の名家に、遺憾千秋の歷史を遺すやうなヿが出來る。つまりは、青年と云ふものゝ氣性を知らねば成らぬ。

◎青年の氣性を知ると言へば六かしいやうであるが、自分の青年の時を考ふれば、夫で直に分る。今は六十歲の老人だからと云つて、一度も若い時が無かつたと云ふヿはあるまい。若い時は又一種變つたもので、浮かれても居らうが、無邪氣の所も多い。其の空想的で、ノンビリとした樂天的の趣味を滿足させるには、男にせよ、女にせよ、相應の慰めを與へねばならぬ。左なくば、意外の方に外れて、醜い樂しみを貪るやうになる。渴しては飮を擇ばず。どうせ飮まずには居れぬものと分つた以上は、飮物に注意して之に飮ませるが善い、全く止めて仕舞へと云ふヿは出來ぬ。

家庭

無用の用

家庭には無用の用と云ふヿを大切とす。何事にても、何物にても、四角四面、ギリ〳〵結着と云ふヿは宜しからず。惣べて間と云ふものゝなかる可らず。

事務、營業を專一とする、オフヒスにては、時間のきまり、物の儉約を大切とし、少しにても急に入用なきものは外に出し、餘計のことは省き、餘人は暇を遣はすやうにするを道とすれど、家庭に於ては然らず。勘定を後にするにはあらねど、之を目前の用務とせず、すべて人々の落付きて樂しくなるやうにするを善しとす。然る時は、自然に勘定にも合ひ、經濟にも適ふやうになる。之れ無用の用一轉して自づから有用の用となる處也。

冷やかにして義理づくめを專一とする家庭を見よ。物事如

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

何にもキチヤウメンにて、表面は萬事整然たるが如けれど、此の外部に故意の整頓を造るの結果は、內部に何處となく不折合を生じ、何となく不調和となりて何日かは面白からぬ破裂を引起すべし。平生あまり切りつめて間と云ふもの丶なければ、融通融和して其の鬱積をはらすの途もなし。勢ひ爆裂するの外なき也。

左れば、家庭には、儉約せざる所に自づと儉約し、規則だたぬ所に自づと規則立ち、無用の器物もあり、無用の入費もかゝり、又無用に明間を費やすともあるやうに見えて、而して自づと其用あるやうになるこそ願はしけれ。誰か、天地の美を捉へて、之れを數に合せて計算せんとする。美に對しては先づ利害を忘るゝにあり。而して後自ら利を生ず、是れ眞の利也。家庭に於ては、一切、實用談を主とするとを禁ず。

かげろふの岩根のつゝじ露ながら
もえなんとする花のいろかな　　契沖

女房役

おうそむ

◎三田の先生が、我家の臺所をよく齊むるものがあるなら、政府へ薦めて三百圓取の官員にするといはれたが、竈を理むる『女房役』となるものは、實に容易の腕前では出來ぬ。親子夫婦相愛すれば、其處で平和な家庭を作るに充分なりなど、今時の若い女子などは考へるが、女房役なるものは、さやうに手輕いものではない。其處には、寄宿舍で三四年も學問ばかりして、世間見ずの女學生などが、思ひ及ぼし難い難義があるから、女學校出たての奧樣などが、ツイ〳〵失敗するのである。夫妻の愛情のみが、決して樂しき家庭を作るとは出來ない、所謂女房役の細かしい惱さい俗務を遺漏なく始末するとが必ず要用である。

◎親や、夫や、子供の四季の衣服の世話なども、實にうるさいものである、それよりも、每日〳〵の食事の世話などは、一年三百六十餘日、今日も明日も同じ事を繰り返すばかり、朝飯が濟めば、晝飯の事、晝飯が濟めば、夕食の仕度、夕食

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

が済めば、翌朝の汁の實を考へねばならぬ、其世話は、大事件といふではなけれども、至極面倒なものと見受けらるゝ。飯時になれば、膳に就きさへすれば良い事にして居る男子などの考へ及ばない處に、充分の苦心がある。若い女子などが、世帶の事とはどれ丈苦心なものかも知らずに、さぞ戀中の夫と家庭を作つたならば愉快であらう、手鍋提げても、別趣の樂　其中に在りなどゝ空想して、さて家を持つてみると、此迄とはちがつて、世間が狹くなる、朝も晩も、飯の事を考へねばならぬとなりて、最初の中は、それでも、いゝ事でもする氣で、面白がつて居れるかも知れぬが、程なく飽々して來て、遂に世帶馴れて仕舞ふまでには、家持とは、さて〳〵面倒くさいものかなと失望する時が、必ずある。

◎さりながら、衣服の世話や、食事の世話位は、よしどれ丈面倒なといつても、このやうな事が、よく出來るといつて、それで『女房役』が少しでも出來たとは、なか〳〵いへぬ。これは畢竟内輪の事だ。家政經濟といふは、さて〳〵面倒なものではあり、收入でも澤山にない時には、隨分、苦心をせねばならぬが、我慢さへすれば、どうにか成立つて行く。家内限りの女房役は、これはまだ尋常茶飯と同一般である。女房役の最も大事な、困難な處は、經濟以外に在る。彼を内務とすれば、此を外務と見て、この外務方面が、頗る困難で、如何に學問が出來ても、智慧の足らない、そして無經驗な、若女房は、歷々として、此方面で失敗し、兼々理想に理想を重ねて來た家庭の快樂なるものが得られない譯になる。又此處に氣が付いても、容易くは出來ないものである。

◎第一、一人でも下女を使ふ事になると、これをよく使ひこなすとが六ヶ敷い。食ひ捨てゝ一ヶ月に二圓かの給料を拂ふのだから、出來る丈使ひさへすればよいなどゝ、よし心では考へなくつても、其の行跡がさうなるのが多いが、かうなると、何邊下女を取りかへた處が、よい下女にさがし當るものでない。其處で、此頃の下女は、どうもすれつからしが多くていかん。昔の家風などだと、五年も六年も、また一生涯も、奉公して忠勤を拔んでた下女があつたが、今は世が饒季だからそんな心掛けのよいものがないなどゝ嘆息する。一理はあるが、よい下女の無いといふは、詮ずるに多分の原因は主婦の使ひ方が不行届だからである。一躰、

下女奉公をするからといつて、食はして貰つて、給料を取りさへすれば、どのやうに下目に見られて、使はれても良いとは思はぬ。如何に旦那様奥様だからといつて、己を見ると人に使はれに生れに來たものでもあるかのやうにして貰ひ度ない。役目だから仕方はないが、主婦などに、火鉢の傍で、長煙管を啣へた顎で差圖ばかりされては、不滿足である。人が遊ぶ時には、自分も遊び度い。主人は花見、芝居見乃至其處此處へ出かけるに、自分は年中火吹竹と雜巾とを離すとが出來ない。それで、何ぼ私だとて火吹竹と雜巾とを以て生て來た人間ではあるまいしと不平に感じる。他人の前でも、下女が〳〵と呼び棄てにされると面白くない。此處になると、給料などいふ事は念頭に置かない。如何に奉公の身分だからといつても、實は身内のものと思つて貰ふのが、夫々の本望なのである。元來無學無智であるから、なほ〳〵此感がつよい。

◎下女一人でも他人が、中に這入ると、家内の脩まりが悪い。それで成丈なら使はずにと思ふても、さうも出來ない場合が多い。下女の使ひ方は、實に『女房役』の一大事件である。

この他人なる下女をして、實に身内に等しき、距てのないものに使ひこなすのが、利口な主婦の腕前である。人を使ふと思へば、自分が使はれる氣でなければならん。主人だぞといふ風を成丈見せないがよい。下女はつゝまり、主婦の仕事を手傳はす丈のものと定めて、命令するのでなくて、賴むといふ方針で、出來る丈、いたはる、またおだてもする、時々は遊びにもだす、また、些細な物でも、給金以外に付屆をする。かうして、内の奥樣は分つた方だと、心から思はすやうにしなければならぬ。主婦の赤心を推して、下女の腹中に置くとになれば、即ち下女は奉公氣が無くなつて、身内のものゝ氣になる。下女自身に奉公氣がある間は、迚も本當に使へるものではない。かやうに心付けてやるには、手間もかゝり、費用もいるが、つゝまりは經濟になる。此處の中では、いゝかけものだて一つ貰つた事はないと思ふと、奉公人氣性の悪い處が發揮し、出すなら出せで、器具にも荒く當る。薪や炭でも、パッパと惜氣なく遣ふので、臺所元甚だ不經濟となる。之に反して奉公氣が無くなると、器具でも何でも、自分の内のものだといふ氣になりて、大切にする。薪や炭でも、燃き落

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

しでも、決して麁末にはしない、主人がいはいでも、万事ッドマヤカに始末して、何事も我家に居る氣で働くので、家政の爲には、經濟の第一となる。

◎一老下婢あり。嘗て、當世の若奥樣を評して曰く、今の若い奥さん位、いけないものはないよ、先づ理屈ばつかり達者になつて、カラ實際の事は、メチヤ〱で解らず、マルデ口から先に生れた人のやうに、能く上手にシャベルけれども、身躰はチットモきかない。そして思ひやりが無くて、吝嗇で、其の癖、大きい事に拔けて、氣が弱い。半片の豆腐や、一切の香の物は、やかましく云ふのに、判取帳の附けかけには、少しも氣がつかぬ云々と。蓋し評し得て妙なりといふべし。

◎奉公人氣性が拔けると、下女の腰は据つて、もの〻解つた此處の奥樣に、いつ迄も遣つて貰つて、何かを見習ひたい、敎へて貰ひたいといふ氣になつて、出いとさへいはなければ、五年でも、六年でも居る。其間まとに忠實に働く。其後に主人で世話して嫁にやつて與れるか、また親元で片付るからとて、暇を貰ふとかになると、自分の妹だとか、従妹だとか、または心易いものだかといつて、どうか遣つて與れといつて、屹度代りを連れて來る。來るものも、主人の事は、兼々聞いて居るから、最初から安心して、大抵は辛抱して、また長年勤める。そして又都合よく出たものは、いつまでも親元のやうにして出這入りをし、親身の者と一つに、笑ひ寄り、泣き寄りをして、自然のゆかしい情合が斷れない。忠勤なる召使といふは、實は如斯にして出來る、即ち主人主婦の思ひやりあつて、ケチでない處から出來るものである。何程ガミ〱と叱られても、思ひやつてやる處に充分氣を付けてやると、喜んで仕へ、辛抱をする。

◎此處の奥さんは分らぬ人だとなると、早く出たくなる、當人の根性もまがつて、スレッカラシものとなり了るに至る。奉公はもと見習の爲、それを主人の心得が足らぬから、田舎出のポットリ者を惡くするのは、人の子を賊ふ所以となつて甚だ不都合千万である。下女を使ふには、人の子を預つて世話する氣にさへなれば、過ちなきに庶幾し。下女一たび不平だと、諸方に、一家の有る事無い事惡口して、吹聽するのは、下司女の根性として、防ぐことが出來ない。かくな

れば、家内に裏切者を置くに等し。平和は爲に破らるゝなり。家内は、恰も一旗旆の下に動く味方のやうにてあるべく、而して下女をして第一に腹心の味方とならしめなければ、團結が出來るものでないのは明かな譯である。吁、下女雇使の『女房役』は難いかな。下男を使ふの困難もまた等し。召使を使ふのは、苦心なものだと、口癖にまでしてゐても、その苦心が段々に薄らぐやうに得使はず。それで幾度も新規に代りを入れては、いつも〳〵苦心のきれ目がなく、そして當人の爲にも、一家の爲にも、不利益なるは、扨て〳〵愚かな次第なり。下司だから、無敎育だから、使い悪いものと斷定するなどに至つて、猶更道理を知らぬものだ。かやうなものは、よく使へば、理屈は知らぬが、實に可愛氣な精神を出すものだ、この精神を導き出だすやうに勉めねばならぬ。

◎たゞに下女下男を使ふのみならず。出入の商人車屋などには、月々の拂は決してヅルカサないやうに、平生目をかけてやらなければならない。さすれば、あの内は分つた内だと、その評判は、彼等の足の向ふ方角に傳はりて、彼等も亦、何事かあれば、早速驅付けて來る。その情合はゆかしくなる。之に反して、彼等に不人望になると、あられもない悪評を立てる。金さへ取れば、早く出入をやめて、振り向ひて唾もかけない氣になる。かくなれば、其家は四面敵圍だ。家族といふ一團躰は、出入の者をも悉く腹心の味方にしなければならぬ。又東京などでは、壁一重しか距てない隣でも、三里も先に離れたといふ有樣で、引越し時にソバの三つも配つて、一寸挨拶に出れば、後は何の付合をしなくても濟むが、田舍だとさうは行かぬ。近所の交際といふが、これはまた〳〵面倒なもので、先づ正月の配り餅から、際々の贈り物、目出度い事、目出度からぬ事の出入、子供へ菓子や玩弄品をやるなどで、交際をする、それもあまり態とらしくてはいかぬ。またこれでケチであるかないかもしられる。其邊の注意から手際は、實に主婦の伎倆を要する處で、その交際が圓滑にゆけば、受けもよく、いざといふ時には、遠い親類よりも、近い隣人の方が、倍ましの力になるやうになるものだ。

◎考へ來れば、主婦が内外の心づかひと働きぶりとは、實に容易ではない、『女房役』とは、實に並やおろそかな考へでは決して出來るものでない。この困難を首尾よく切り抜けて

こそ、家庭の平和は出來る。女學生等が、理想ばかりしてゐる架空的のホームは、神聖だとか高尚だとかの方面ばかりを多く見てこの俗事を容れないから、いよ〳〵實際になると甘くは行かぬのだ。寄宿舍などに居て、思ひやりもなく、下女を追ひ使つた後では、急には『女房役』は勤まらぬ。

講義

惡少年の感化事業と出獄人保護事業

◎惡少年感化事業

凡そ犯罪者の罪のよりて來る處は多くは一朝一夕の事に非らず。大低は其少年時代よりして、或は遺傳により、又境遇によりて、罪に罪を重ね、遂には大罪を犯すまでに修業し上ぐるなり。一時犯たとへば、一時の過誤または憤怒によりて、人を殺し、物を盜みたるが如き罪人は格別なれども、其外の

犯罪者の成立ちを見れば、多くは第一孤兒棄兒、第二乞食、第三スリ、カッパラヒ、第四竊盜と、年と共に仕上げて、遂には强盜、殺人などの大罪を犯すに至る。放火の如きは、彼等にとりては、まだ宵の口の仕事にして、乞食より、スリに出世する間にて往々之を行ふが如し。現に三月の本郷大火の如きも留五郎といへる十四才の小兒が、放火せしもの、また數日前に下谷警察署より迷兒として、東京養育院に送りたる花村新六といふ十歲未滿の一小兒が、圖らざりき、淺草觀音、下谷、吉原等に放火したるものならんとは。これは皆兄貴とか親分とかいふものゝ、火事に乘じて竊盜を働かんが爲に、かゝる小兒を强迫的に敎唆するによるものとぞ。またかゝる小兒がスリを働くも、また敎唆によるにて、親分は如何なる種類價値の品によらず、奪ひ來れば、二錢を以てこれを賞し、この二錢はまた兄貴の懷に入りて、本人は僅に菓子の割前を貰ふのみとぞ。

◎而してかゝる不逞の惡少年は其數尠からず、而してかゝる者の其罪は惡むべきは、當人は實に可憐不憫の極なり。吁、彼日本橋河岸に魚腸を拾ふもの、紙屑拾ひ、または食を門前

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に乞ふ不愍の乞兒の行末や恐るべし。社會の犯罪者を救治せんとするには、必ずや良好の監獄制度を要し、また出獄者を保護して、再犯の悪意を萠さゞらしむるを要するは勿論なれども、彼行末は竊盜、强盜、放火、人殺ともなるべき、悪少年及び少年犯罪者を救治して、これを感化善導せずんばあらず。滿八歳以上二十才以下の放逸不良の者を矯正歸善せしめんが爲に設けたる全國の懲治場にては、明治十五年には收監者三百五十七人なりしも、累年增加して、明治二十六年には千百七十四人となれり。また全國少年犯罪者の數は、明治十五年には男八千二百十六人女八百人合計九千〇十六人なりしものが、年々に其數を加へて明治二十七年には、男二万四千四百四十二人、女三千二百二十八人合計二万七千六百七十人となれり。されど此統計の比較の示すが如くに、實際社會に放浪する悪少年の數に消長あるものにはあらず、またさばかりの數あるに止まらず、明治二十七年の悪少年數も、同十五年の數も、事實に於ては等しく其數や頗る多大ならんも、統計は之を示すに道なきなり。この多大なる悪少年を矯正善導するには、現在の懲治場または監獄の如きは其効なく、却て寧ろ害あれば、即ち善良なる感化院及救兒院の設けなくんばあらざるなり。

◎外國に於ては早くより此必要を認めて、各國共に慈善有志者の寄るべなき男女乞兒、又は少年犯罪者を救濟感化する種々の組織あり。佛國のメットライ感化院及び米國紐育州立エルマライ感化監獄、同ニューヨーク市の救兒協會の如き、頗る盛大にして其名あり。英國にては感化院條例なるものありて、其民設を奬勵しまた保護す。英國に在りては、感化院五十有餘、感化船三艘あり、此感化院なるものは即ち少年犯罪者を救治する處にして、他に又多くの工藝院ありて、犯罪の傾向ある悪少年を救治す。

◎紐育市の救兒協會及び之と連係せる米國女子救護協會は、授職學校を設くると三十三、外に新聞賣子の爲に設けたる寄宿舍、女子の寄宿舍、夜學校、病院、轉地療養所あり、また少年の農業移住事業あり。この救兒事業は頗る良好の成績を奏して、創立以來男女寄宿舍に修養したる男女兒二十万人、爲に大いに紐育市犯罪者の數を減じたり。また農業移住事業は最も良好の結果を奏して、創業後四十年間に救濟して諸州

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の良家庭に入れて農業に就かしめたる不幸少年男女の數は八万四千三百十八人にして、其中百分の八十五は善良なる人間となり、幸福なる家庭を營むに至りたるもの多く、また中にも、教師となり、傳道者となりたるものも尠からず、一人の者の特に傑出して州知事となりたるさへありといふ。

◎良好なる感化院及救兒院の必要なると斯如く、我國には、現に唯一つ東京感化院なるものあれども、これは父兄等の依囑を受けて、惡少年を監督するものたるに過ぎず。而して目下東京養育院内に設置せられつゝある感化學校は、少年犯罪者及不良少年を一般に救濟するを目的とするものなり。この感化救兒院なるものは啻に一二の大都會に於けるのみならず、又全國各處に之を設立して、官民共に之を維持保護して、而して將來の犯罪者を未然に救治せずんばあらざるなり。

◎由來犯罪人は、多くは棄兒孤兒の類にして、家庭の温き空氣を呼吸せず、父母の恩愛を解せず。彼等は曾て人より愛せられたる事なきものなり。されば、惡少年を感化するの第一法は、人の情愛を解せしむるに在るなり。たゞに惡少年のみならず、老功の惡徒と雖も、一度び慈悲ある人の情を受くるときは、感奮して、爲に心機一轉して正業に就くに至るものなきに非ず。紐育救兒協會の創立者たる博愛慈善の人チヤールス、ローリング、ブレース氏の浮浪の惡少年救護の方針は「個人の感化と家庭の生活とは、團躰組織の生活に優る事、職業と自活の途とを教ふるとは、施しをなすに優る事、肉躰上の欠乏を滿すと共に道德宗教の眞理を與ふる事、全く境遇を變ずるとは、惡少年を救治するの最良法なる事」といふに在りて、凡そ惡少年及犯罪者の感化矯正を思ふものは、先づ第一に個人の感化と家庭の生活とを彼等に與へて、人の愛情の何たるを解せしむるの最大緊要なるとを感ぜざるはなし。

◎原氏の出獄人保護事業

◎凡そ罪人の罪を犯す。其天性、教育、遺傳、境遇、習慣によると雖も、また實に止むを得ざるに由るもの多し。彼等の情狀を考ふれば、憎むべきといふよりは、寧ろ愍むべきの甚だしきものにして、大方竊盜强盜の如き罪人の初犯として

獄に投ぜらるゝまでには、既に數回又は數十回の罪を犯したるものにして、彼人命犯の如きは、容易に再犯するものに非らざれども、此盜賊犯の如きは、少年以來養ひ來りたる習慣が第二の天性となりて、盜まざれば安んせず、また生活すると能はず、而して殊に出獄後の如きに於て、世人は素より己を信用すべくもあらざれば、よし正業に就かんとの志あるものとても、生活の爲、止むを得ず、再犯三犯を重ぬるに至るなり。されは法律が罪人を增加するを目的とせざる以上、其監獄改良は素より、出獄者の保護に力を用ゐて、再犯を防がすんばあらず。出獄後に附刑として監視期あり、此監視は即ち、保護授職安堵の方法を與ふるものとならずんば非ず。」

◎出獄人保護は甚だ重要なる事業なれとも、政府に於て未だ何等の計畫もあらず。然るに一昨年故英照皇太后陛下の大喪に際して、減刑の特典を蒙りて、一時に多數の出獄人ありしや、之を保護せんが爲に、數種の出獄人保護場は東京及び地方に起りたるが、其中にも最も見るべきものは、原胤昭氏の設置に係るものなり。同氏の保護事業の成績は、本誌にても屢々報告したるが先づ今日までの處にては、結果頗る良好なるものなり。創立以後引續き引取人なき出獄人を其寄宿舍に入れて世話す。同氏の今日までの經驗を聞くに、

◎出獄人にて取引方を依賴に來るもの續々なれども、本人に父母兄弟親族等の、引取られべきもののあるものは、これ社會が世話すべきものにあらねば、一切承諾せず。いよ〳〵此者は親族の存否も判明せず、鄉里も分らず、毫も寄邊とすべきものなく、其儘に打棄て置けば、再び犯罪するより外なきものならば何如樣にも世話するなり。かく寄邊なきものにして、今此保護場を見離されては如何とも致方なしといふものならねば、彼等を支配し監督するが上に、權威を以て臨むと能はざるの不利ありと。而して、里元親元などの別らぬものと雖も、手に手を盡して、之を搜索するに、奇妙に探し當て、兄弟親族などの生存し居るものありて、引取を申出づるとも尠なからず。如斯き場合には、多年の惡徒たる當人も、欣喜おく能はず、惡心も次第に消滅するなり。されば、成丈家庭に彼等を入れるやうに勉む。出獄人はいづれも原氏が諸方の樣々なる職人の親方に渡りをつけて、就業せしむる中に、仲間または親方のおかみさんなどに依賴して、相當の女房あらば

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

世話して貰ふとにする。現在此迄同氏の世話したるものにて、諸方に家を持ちて都合よく暮し居るもの尠からず。非常の苦勞を仕上げて來たものなれば、却て辛抱が良いものぢやと、妙なる處に悟りを付けて、嫁に來るものもあるなり。かくて家を持ち、幸に子も出來るとなれば、覊絆の爲めと、これまで嘗て經驗せざりし愛情の樂しみを知ると共に罪惡に次第に遠かるなり。

◎犯罪人は人の情愛といふを知らぬものなれば、大抵は個人的に憂鬱性にて、ヒガミが多し、それが獄裡に投ぜられてはいよ〳〵この精神を助長す。されば出獄人が同一の寄宿舎に居りても朋友といふものも出來ず、また職業に就かしむるに、親方仲間と折合の悪き事もなきに、往々自分のヒガミより轉業を欲するもの尠からず。されど家でも持つやうになると、必要上辛抱をなし、また人も自分を信用して呉れるなるべしとの自信が出來て、万事都合よくなるなり。また他人の都合よくなりたるを見ては、自分にも辛抱の氣を起すの良き敎訓となる。原氏自身にも、何故あの悪徒が、妙に辛抱する氣になりしものかと理由は分らぬが多しとぞ。

◎寄宿舎に在るものにても、原氏の子女等が愛くるしきを見て、子供を愛するの情を自然と起して、之を相手に樂しむやうにもなるとぞ。五月の節句の前日の如きは、原氏が三四圓の金を出して、子供の祝ひに、柏餅を製れといひしに、皆々殘らず、朝から、眞黒になつて、まとに樂しさうに之を製造したりとぞ。また出獄後段々に心が落付くときは、二三ヶ月後に至れば、其者の容貌は實に見ちがへたるが如くに立派になるとぞ。

◎彼等の經濟を世話し呉れるにも、金錢の出入の、彼等に分るやう明白になり居らねば、悪しき感情を起して、保護者を信用せぬやうになりて、當人の爲にも改善の障碍となる。彼等出獄者を保護するには、保護者なるものは、職人の親方か、博徒の親分の如き、親方的精神を以て、威權に兼ぬるに慈愛を以てして、彼等をして心服せしめざるべからず。彼等には、妙に、義理がたき處ありて、彼等が所謂事の分つた人と信ずるものには、心を傾けて之に從ふなり。維新前には、出獄人の口入を業とせしものありしが、原氏の事業は實に其流を汲んで、之れに高尙潔白なる理想と慈悲仁愛の熱情とを

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

加へたるものなりといふべし。

◎之を要するに、年少時よりして、悪業に身を委ねて、終に重懲役以上の刑を受けたる如き老功の悪徒をば、教化して全く善良の人とならしむるは、殆ど望むべからずと雖も、彼等をして、快活なる境遇に置いて、其憂鬱性を散ぜしめ、社交場裡に投じて、其個人性を棄てしむる等、凡て今日まで閲歴し來たる境遇と全く異なれる境遇に、彼等を置かば、自づから罪悪に遠ざかるものとなるべし。悪少年の感化に於けるも、また境遇の變化を要す。これ實に紐育救兒協會が、其農業移住事業に於て、最も成功したる所以なり。

文藝

不器用の上手

きよくほ

當時多少の名ある書家某氏の談なりといふを聞くに、元來下手なるものゝ、稽古して出來た書は韻致ありて、面白味あり。されど元來器用なものゝ稽古した字は、巧みなる丈にて面白味に乏しと。たゞに書に於けるのみならず、何等の學藝に於けるも、亦同樣の道理あり、不器用の上手といふは實際の事なり。

支那人は日本人に較ぶれは、指の先の働き不器用なり。不器用なるが、苦心して勉强する故、其書の如きは一字一字に力を入れて書きて、何となく間が抜けて、不恰好なやうにても、實は風韻ありて決して人を飽かしめず。然るに日本人の書となると、形は奇麗で、手も早く書けど、大方は器用に過ぎて、面白味なし。支那人にして、貫之、定家、尊圓其他の流義の如き、かな書きの、まとに巧みなる筆法に達し得るものはなきが、また日本人にして、まとに王義之などの骨髄を得るものもなし。

支那の文人畫は、何處となく面白きものなり。然るに此畫はどうしても、器用なるものゝ書き出したるものとは思れず、いづれにしても、不器用者の畫なり。日本の文人畫は、如何に不器用にしても、器用が加はる。北畫南畫と雖も、支那人の指先の不器用なるを示せり。而して古へは之れを彼國より

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

傳へて、我國に流れ入りにし、諸畫の風を見よ。時代と共に次第に巧者器用なるものとなれるに非ずや。浮世繪は勿論、土佐の畫風などは支那人には出來得べきとには思はれざるなり。

また此頃我邦の洋畫界を風靡する佛國のアンプレショニスト派の畫風は、これを從來の畫風に比較せば、どうしても不器用なり。而して其面白味ある處も亦其不器用なる處に在り。此派の開祖として知らるゝ人は、元來不器用なる畫家なりしとか聞くは實なるべし。

茶の湯の諸器具は、元來素人作の不細工にして面白味あるを貴びたるなり。凡そ何物にても器用に過ぎたるは奇麗なれども、趣味はなきものなり。彼菊五郎は、凝性にて、舞臺に出るには何から何まで、些細の事まで殘らず注意するが故に其藝の至つて細きに感服せしむと雖も、巧なるに過ぎて、腹はなし。これに反して團十郎は顔の隈取りなど、麁末千万にて、眉毛など、指の先に墨をつけて引くといふ風なれば、巧み器用といふ點は乏しけれども、腹ありて大きし。

巧みに器用なるものは工夫を積めば積む程、形が小さく、不器用なるもの丶工夫した出來ばへは、量が大なり。古今諸藝諸道に名あるものは、必ずや不器用者の練磨して成就したるものなるべく、天成の器用者には少かるべし。一躰一事に器用なるものは、また何事にも器用にて、所謂小器用に立まはるより、此が爲に大成するといふ事はなし。不器用ものは、一事に道がつけば、これに專心專意となるより、遂には目覺しき出來榮えをなすものなり。たゞに藝道のみならず、學問に於てもまた然り。不器用にして勉めて怠らずんば、遂には上手となる、彼器用といふもの、幸に似て其實は不幸なり。これあるが爲に其人をして小ならしめ、大成せざらしむ。

上田宗固の槍

社友長井金風氏備後日報に主筆たり。頃日萬春園の藝備同志懇親會に臨んで「萬春園の感」を述べて、上田宗固の槍道に就き、所感を談ずると左の如し。

此の亭舍、此の林泉は舊淺野侯の客卿たる上田氏の別莊にして、今現に楣間に見る如く賴杏坪の萬春園と命じたる所なり。

上田氏は一萬二千石の大身にして其の家は今尚顯然たり。而して、之れが祖は、即ち有名なる上田宗固にして、廣島人にして宗固の何人たるを知らざるものはあれども、彼の新庄村の宗固松を知らざるはなかるべし。今余此の庭を一見するに、池上の半面は恐くは光明浦の景を形取れるものなり、淺野氏の舊封は紀伊にして宗固松は元は和歌浦に植へしもの後藝州に移るに及んで更に新庄に植へたる也。

亓は姑く之れを措き。余の宗固のことに感じて今日の國勢に鑑みる所以のものは、其の持槍に在り。元來宗固は茶道と、槍術とに有名の人にて、共に一派を開けり、宗固は鎗一筋にて文祿慶長天下の勇將猛士雲の如き間を獨歩したる豪傑なり。然るに此の豪傑の持鎗は如何なるものなりしかといふに、實に意外の感なくんばあらず。

諸君は定めて此く思ふなるべし。此かる豪傑の用ゐしものなれば重さは幾十斤かありて、非常の堅木の柄にて三間も四間も長きものなるべしと。然るに今現に上田家に保存しつゝあるものを見しものに聞くに、實に意外なり。宗固が當時勇將烈士雲の如く、林の如き間を縱横して、天下を獨歩したる槍は、長さは一間にも滿たず、其の柄は至つて輕く、極めて脆き桐の材を用ゐたるものなり。

余は今此の林園に來り、此の風光に對し、宗固が足の曾つて蹈みたると同じ土を蹈み、宗固が眼に曾つて映じたると同じき池水に對し宗固が手づから植たる翠重々たる老松の清風を身に受け宗固が靈精神采の奕々にして生動するを覺えずんばあらず、而して今日我邦の國勢に顧みて赧然たらざるを得ざる也。

抑宗固は何故に此かる短く、輕く、脆き槍を用ゐしものなるべきぞ。思ふに彼れは茶道の名匠なり、彼は茶道に於いて、和を知り、敬を知り、淸を知り、寂を知り、以て其の身の行住坐臥共に脫然として風塵の表に立てり。而して彼れは、禪學に心膽を鍊り、精神湛然として常に氣海丹田に充溢せり。彼れは茶を以て、侍ひの儀法を學び、禪を以て侍の精神を養ひたり。彼れの使ふ槍は、槍にあらずして、精神なり、儀法なり、換言すれば何某作の槍の穗にもあらず、桐の柄にもあらず、樫の柄にもあらず、輕重何斤にもあらず、長短幾何にもあらず、宗固の槍は、宗固其れ自身なりき。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

夫れ士人に尙ぶところは、無事端然、有事斬然たるに在り、國家亦然り、國家の國家として他列國の間に立つや、平和にして國際の禮あり。義盡き仁窮まれば玆に國際の戰あるのみ。又宜しく無事にして和敬淸寂、宗固が擒虎の手を收めて二疊乃至三疊の茶室に端坐して、無念無想を觀じつゝあるが如く、惰容あるべからず、無行儀、無作法あるべからず、己れを待つ此くの如し。况んや人を待つに於いてをや。今日本を以て之れを擬人的に覗ば如何。其の自ら處する所以の者は果してよく終日閑居なるを得て惰容なきと心得ある古の侍の如きを得るや。往々午睡鼾々たるものあらざるか、而して一旦緩急なるの時、又よく斬然機を制し毫も周章狼狽の態なきこと、侍の平生の嗜みといふものに副ふを得るか。

母馬が番して呑ます淸水かな
竹の子も品よく遊べ雀の子
泣くかさて母が踊るや門の月
人聲に子を引きかくす女庇かな
雀子や川の中にて親を呼ぶ
一茶

隨感

○春の夜

人影に心づきて、ふと仰げば、明月、太空にあり。天地一面の薄衣をかけ、木色に暗澹として姿を現す。梢の花は雲を着、流は煙を引き、水音琴々として祝ふ、抑も何の家の吉事かある。春の夜こそ多情なれ。

○月光の裳

人世、月夜ある何の祝福ぞや。天、如何なれば此の美麗の風景を賜ひしやらんと、ある夜切りに感泣して樹下にたゝずみけり。去るにても、月夜の美は千古つねに斯の如く、余が生來の多年もつねに斯の如かりしが、此後も亦た長久に斯の如きか、是れ何等宏大の賜物ぞや。もしや若し夜ごと〳〵に常に斯くあらば如何に。ふと首をあげて嫦娥を望まんとせしが、何やらん、面はゆき心地してサと赤らむ。月光、白紗の裳に似

たり・吾眼前に搖曳す。しみ〴〵と其美に慕ひて一念、春の花見の樹下にひどし。

○我が風光

松は禪僧の如く、武士の如く、俳人の如し。之に月を宿して、乃はち靈を添ふ。更に水に映じて姿を添ふ。此等日本の風光、或ひは列邦未だ見ざるの雅韻、希はくは世界風流の士を招いて、其の興を同うすることを得ん。

○只だ自ら棄てざる耳

煩腦、悟脫の差別を言ふことを要せず。國家人生の問題を暫らく休む。治國平天下の經綸を政士に托す。只だ夫れ何事の何の理由によりてと言はず、人の如何にも物狂はしきほどに思ひ屈したるを見乍ら、之に慰めを與へて、其の心のもつれを解き得ざる吾力こそ淺ましけれ。扨ても、吾が修養の薄らかにて、吾氣品の弱きかな。確信、人を動かすに足らず、實跡、理の筋を遺さず。天を仰ぎて天遠く、地を踏みて地軟かなればこそ、人に安住の家居を指さすことも覺束なくはあるめれ。つく〴〵と吾身のよわきを恨みて、影の淡きを歎き、扨て〳〵詮もなき學問の効かなと思ひ屈する人、亦も世にありや。願くは其敎を聞かん。

○可憐の子

呂泣は露に泣けるものか。其聲凄朗、其調何んぞ慘なる。而も一種熱烈の情懷鬱勃として天を衝かんとす、又、楚々人を動かす、文の人をして泣かしめ、怒らしめたるもの、呂泣の如きは多く有らず。其の一小品の中に曰く、余が愛する所の娘子は、只だ泣くづほれて一心他愛なきものと。丈夫、可憐の兒を懷ふの情、赤裸々に告白せられたり。

○神壇

天主敎の弊と云ふものにや驚ろきけん、新敎は亦た簡率にて、如何にも殺風景ならずや。殿堂の事は數ば言ひぬ。家門戶々の禮拜につきても、用意少こしく人情に差はずや。神に神棚あり、佛に佛壇あり。小さき乍ら、夫々の備へは出來べきものを、基督敎徒の家も亦た一種の神壇を置く或は可ならず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

や。茲に、御像をかけ、もしくは金光燦爛、又は古色靄然たる十字架を置く。家庭朝夕の禮拜の爲めに、嚴莊の助けはあるべし、何の害かあらん。弊は信薄きより來る、神壇あるの故に信を薄くするとはかつてあらじと思ふ。扨ても、日本の大畫は、佛教の信仰隆盛となりてより起れり。吾國未だ斯教の畫家秀逸なるものあらず。ありと雖も、未だ任ぜざるが如し。之れ眞に遺憾となす。

◎瘠し牝鶏

苦しみて産みし卵を亦た孵し、雛を羽ごくみて勞を忘るゝあはれの牝鶏よ、自からは食はず飮まずして瘠せたる哉。誰れが爲めの獻牲ぞ、かの可憐の雛子、羽ばたきて戯むるゝを見よ。御身、身を勞して死するも厭はじとすれど、御身もし死せば、かの雛子は誰が護るぞ。御身飮食を増して必らずや健在せざる可らず。

夏衣なほやまさむくたづねみむ
のこるさくらの雪にあふやと　　長流

史談

史論片々（一）

井華

◎堯舜禹三代無爲の政治は、儒者が理想の國家組織である。我國の漢學者などまで、朝な夕なに之を理想としたが、しかし其無爲の政治なるものゝ眞相は、果して如何なるものなるかを承知したものがあつたか、どうだか。これは支那國風に最も適した政治であつたのだ。其數千余年の昔の支那國情は知れぬが、やはり今の國情を以て、昔を推すとが出來る。支那人は一躰に政治といふものに重きを措かぬ、個々の自治で治めて、そして上に立つ帝王といふものは、成丈よき人で、人民を苦しめない、租税を澤山取らない、いらぬ事に干渉しない、そして儉約で無慾なものであれば、之を崇めて置くのだ。支那人の政治上の理想は實にこれだ。人民は國會もいらない、八省九省も欲しくない。たゞ自分等が

堵に安んじて、壌を撃つて、腹鼓を打つて喜んで、そして、金が儲かればよいのだ。この理想に丁度適當したのが、堯舜の政治で、彼等は儉約無慾を旨として、其住居はといへば、土階三層茅茨伐らずといふ極々粗末なあばら家であつた。支那の帝王はこれで濟んでゐたのだ。帝居輪煥の美、外列國に對して國を辱しめすなどいふことは、とんと考へなかつたのだ。桀王が、僅に象牙の箸を造らへたからとて、奢に長じたとて歎息した位。されば桀紂が奢侈驕傲であつたといふも、高が知れた者だつたらう。而して三代の政治は、人民に權利があつて、成丈自分の理想に適つた善人を公平撰擧するのだつた。堯が舜に讓つたといふも、舜が禹に讓つたといふも、其眞相は、人民が舜禹を撰擧したのだ、いはゞ簡易なる大統領撰擧である。政治といふものは、一躰にこれでいゝのだ。未開で万事手輕い時代にはこれでもいゝが、文明複雜の國ではさうは行かぬといふ者もあるなれど、人民はどうした處が、輿望のある善人より外に、服從するものではない。政府も國會もあつても、人民は追々これを信用しない。つゞまりは地方々々の人望家が政治の實權を握るやうになるのだ。支那は素より廣漠なる大國であるから、北の方に居る中央政府の威權が、中國中に行き渡る筈がない、而して何者が人民の頭を支配して居るかといへば、彼の道士といふものだ。一鄕一村に一人宛位の道士といひて、老莊の遺敎を奉ずる、無欲で多少學問のある人が居る。自分には妻子も無ければ、たゞ額に汗して半頃の田を耕して食ふ。支那人は一躰に慾が深い、其中に居てこの無慾な人があるので、衆人は之に敬服して、其言ふ事には從つて行く、道士は格別の政治運動もやらないが坐ながら人民に對して大な權威を有してゐるのだ。堯舜の政治といふものも、實にこれだ。帝德何ぞ我に在らんやと、人民は思ふてゐて、そして無意識の間に、帝の則に從つてゐたのだ。老子が、「賢を尙ばざれば、民をして爭はざらしむ。得がたきの貨を貴ばざれば、民をして盜をなさしめず、欲すべきを見さざれば、心をして亂れしめず。是を以て聖人の治、其心を虛にし、其腹を實にし、其志を弱にし、其骨を强くす。」といつたのは、支那的政治の根本の理想である。

◎堯舜禹三代の政治を、後代の儒者が、あゝだかうだと當て

推量して、之を唱道しながら、其實は、其無爲の政治とは果して如何なるものかといふことは、當年の土百姓程に知らない。それにいろ〳〵理屈をつけ、巧みをつけるから、いつも的がはづれて、遂に三代の治に歸すことが出來ない。學者といふものは、一躰に神經質なものであるが、神經質といふことと、無爲といふことは、既に根本に於て相反いてゐるから、之を知ることは出來ない。夏殷周を經て、秦漢唐と傳はつて、段々と神經質が、いろ〳〵と政治を工夫するので、中央政府の組織は立つても、人民を支配する力は段々と薄らいだのである。支那は元來、平民政治の國で、簡易なる共和政府が、一番行はれよいのである。貴族政治の國でも、帝王政治の國でもない。しば〳〵歷代を變へたのも、この國情民意の欲する處から來たものである。

◎小松内府重盛が、死を熊野に祈つたといふことを、後の世の史家なども、之を解釋するに苦しんでをる。それほどの賢明で孝行な人であるに、平家の末路を目先に見て、其苦厄を免れんとしたのは、甚だ不仕末な考へだなどゝ非難するものがあつても、之を辯護するに困るのが常だ。死を祈つたといふことを皮相的に觀察するから惑ふのだ。之をば、内府の篤き宗敎心から、一國一家の爲に、身を犧牲にして、神に祈つたと見れば、よく筋道の分つた話で、重盛如き人物のなしさうなことだと分る。また死に臨んで、宋國渡來の名醫の治療を受けなかつたのは、天命を知つてゐたからである。それを本朝鼎臣の外相を以て、異朝浮遊の來客に見えん事、かつは國の恥、かつは道の陵遲なりといつたなどいふは、物語作者のつけ言だ。これでは宋國育王山に金を献じた事が分らぬ。この献金の事も、非難するものがあるが、それも皮相の觀察故で、重盛の意では、必ず宋國と交通せんとの志であつたらう。後世菩提の爲ばかりではなかつたらう。重盛は胸算に此位な方策かなくて、無暗に金を他國に棄つるやうな人ではない。此節琵琶湖を若州の方へ掘り割うといふ說があるが、重盛が既に之を考へて、取調べた記錄が殘つてゐるさうだが、さやうな事もあつたらう。

◎平知盛もまた並々の人でなかつたやうだ。第一此人が、平家一門いよ〳〵の末路となつて海底の藻屑と消えねばならぬ運命にあつて、女院二位尼などの乘つた御船に來て、船中を

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

自から掃除して、見苦しき物など海に取入れ、そして女房共に、めづらしき東男を御覧ずらんといつたといふ事、事實とすれば、何と尋常の人では出來ぬ所置ではあるまいか胸中千万無量の涙を含んで、チヤント諦めをつけて、平然として船掃除をするとは、見上げた人物だ。また東男を見るべしとの一言、戯言に似て實は然らず、胸間に蟠まりし慷慨悲憤の熱情を絞り出したものである。知盛が自から有爲の志を抱きて、而して平家一門中殆ど語るに足るものなく、やみやみと東男の刃を受けざるべからざりし此時の衷情果して如何ぞや。平家没落史を讀む時、この一事に到りて誰か悲哀實に禁せざるものあるなり。

◎北條高時既に滅びて、いよ〳〵建武中興となつた處が、後醍醐帝は政治に倦み、奢に耽り、公卿もまた之に傚ひ、功臣は報いを得ず、女謁内奏盛んに行はれ、不換紙幣は亂發せられ、國土疲弊した。武臣の不平は勿論、戰亂の疵はまだ癒えざるに此有樣故、人民は疾苦に苦しんだ。そこで天下みな共に北條氏の簡易政治を慕ひ、北條氏でなくても、誰かの武家の政治をと翹望するに至つたは、これは自然の數だ。何故に

此樣になつたかといふに、曩には天子でも公卿でも、武家からの僅かな當てがひ扶持に窮々としてゐて、其上に蒙塵となり、流し者などになつて、困り切つたものが、此度は金も自由になり、權力も有るとなりては、喉元過ぎて熱さ忘れ、金が使つて見たく、色々な贅澤もして見たく、それで失敗したのだ。いはゞ俄分限者が、乍ち奢りに長じて、少しの間に身代をたゝき潰すのと同一般だ。貧乏者に大金を持たすと始末が悪るいのと同樣だ。

◎足利氏が不忠臣で、新田氏が忠臣のやうになつてゐるけれども、この二氏はもと〳〵家門の榮華を争ふが爲に兵を擧げて北條氏に抗しなものだ。夫故足利氏の叛旗を擧ぐるとが一歩後れしならば新田氏が必ず背いて、そして尊氏などは忠臣の列に入たであらう、公卿の政治が、全く人望がなくなつたから、武家の政治を起すものがあれば、人民は即ち之に附從して、成効疑ひなかつたのだ。足利尊氏は此機を見るのが早かつたのだ。不忠臣といふは王家の方から、見た事で、人民の方からは、忠も不忠もない、自分等をよく治めて呉れるものがあればよいのだ。新田氏が天子を挾んで天下に號令

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

したから、之に敵するものは不忠となつたが、この南北朝の爭ひは、眞實は兩家政權與奪の爭ひに過ぎない。北朝から見れば、足利氏は忠臣で新田氏は不忠臣だ。

◎其處になると楠氏三代は實に感嘆に堪へない。正成が、一度び笠置の行宮に鳳詔を拜してより、一諾千金よりも重く、政權を得んとも考なければ、たゞ義を守りて、王家の爲に盡した。一たび志を決してからは、騷がず動ぜず、褒美の高が少からうが、馬鹿な公卿共や、自分よりは手柄の薄いものが、高位高官を貪らうが、夫が爲に決して心を亂さない。自分は野心家の踏石にせられたり、いつも下働きをさゝれて計り居ても一向に平氣なもので、たゞ／＼道と思ふ處を盡くしてゐて、これをまた子孫へも遺法としたのは、實に許し樣のない程俊れた大人物だ。楠氏の働き振りを見ると、實に涙が溢れて、感歎するより外はない。

◎楠正儀といふは、また非常の俊傑であつたに相違ない。彼が北朝に降つたのは虛だといふものは、彼を知らぬものでまた北朝に降つて、楠氏を辱しめたといふものに至つては、更に道理を知らぬものだ。正儀の時代になつては、新田氏は既

に滅亡同樣で、足利氏の方でも尊氏は既に死んで、子孫はいよ／＼榮える、そして武士も人民も既に戰爭に充分飽きて居る。此時となつては、最早今までの行がゝりの爭をやめて、天下を一に合して、國家の治安を計るが第一の良策となつたのを、正儀が看破して、幸北朝には細川賴之の如き譯の分つた人物が居たから、小人の口の端にかゝる汚名などは、毫も意とせず、奮然大事を決するの烈志を以て、北朝に降るといふ名義で、首尾よく敵味方の交渉を濟まして、政權の合一を成就したのだ。これは恰も海舟伯が、江戸城明渡を斷じて譯の分らぬ幕臣などから、勝は幕府に對して不屆なやつだといはれた位は平氣で居たのと同じ趣きがある、海舟氏の如きは、必ずやよく正儀の心事を洞察するとが出來て。同情に堪へない處があるに違ひない。正儀の所置はこれまた必ずや正成の志を得べきもので、楠氏三代の忠を全うしたものだ。彼は忠義などいふとを狹い量見では考へてゐない、國家の大事といふを眼前に認めて、之に處したのだ。然るに、末流共が其後時々旗あげをして直に亡ぼされたのは、實に先祖三代の志に背くの甚だしきものだ。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

有感の記

◎かなしき妻

鷗

さるにてもなつかしきかな、我夫の君、花開き花散り、春は既に暮れて、君し未だ家に歸りまさず。閨中、針を止めて、枝上の鴉、啞々としてなくに、もしや、悲しき便や聞かん、あはれ、良君何の時か、遠游の踵をかへしたまふべきと、恨みては怨み。思ひては憶ふ、いとも哀れなる閨怨の妻よ。御身の爲には、あきたらはぬのみなるべけれども、我や深き同情を寄せなん。されど御身の恨は、頼める人の、にこやかに家路に急ぐ顔だに、一目見るを得なば、春の雪のごとく乍ちに消ぬべけれども、思ひ見よ切ても世にはいや更に不幸の妻の多かるを。

一度うなだるゝ首を仰げて、我と共に、かのかなしき妻の爲

に、情には熱き、おもひやりの涙を濺げかし。暫らくは、己が嘆きを忘れて、彼の嘆に耳をかたぶけよ。

ア、、我夫の我につれなきは、忍び難きが中にも、なほ忍ぶべきも、なにとてかくは心驕りて、よろづに智慧なき業をし玉ふにや。歸ぎまゐらせし其折には、不束なる我をも、是非にと申し給ひて、二世の契は渝らじと、うれしき誓を聞かせ給ひし、其情の言を、今は頓に忘れたまひて、仇し女の二人三人なほ其上に、褄重ねしたまひ、我のみ君が家の妻なるべきに、素性も知れぬものに、我座を強ひて分ち取らせ給ふさへあるに、秘めに秘めて、あやしき宿りをも營みたまふよ、君は我を妬心深しと見はなさん、我は嫉ましと思へども、なほ我心の切なさ、君の更に知らざる風したまふは、まだし耐ふべきも、放埓限りなきの故に、舅姑の君の、妻たるものゝ奉公足らぬより、我子は此有様と、我を恨みたまひて、我心の苦しさよりも、おの〳〵の心に刺を植ゑたまふとの悲しさよ。召使ふ者共の、主人のおもひやりなさ、不行跡を、嘲り罵り、兎角の陰言絶えぬばかりか。折々は我が心を得顔に惡口聞かする其つらさ。夫の落目をば、心して拾ひもてゆけ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ば、はしたなきもの等の、我をばよきにいひて、いよ〳〵夫を悪様にいふもあり、家の内はまだしもなれど、夫の悪名は隣より傳はりて、里にも町にも聞え、不名譽と不信用とを重ぬるに、少しも意としたまはず。祖先の汗血を絞りて子孫の爲と貯へたまひし富も、譽れも、我夫の代にて、かばかり傷け給ふ。おのれは此家の祖先の恩は知らざれど、縁につながれては、今の有様を、見ぬ世の人に何と申譯すべき。あはれ、筋目正しき此家の榮えも今は末なるか。先祖よりして恩顧をかけし人々とても、夫の驕慢ゆゑに、そむき〳〵になりつれば、さびれ行く日には、よりむらがりて、家の親柱を曳き倒さんは必定なるに、まして他の人々をや。さるにても夫の何とて、この恐しき行末に心付き給はざるにや。妻の諫はうはの空、我のみひとり心砕きて、何とぞ家名を落さじと思ひなやめば、其惱の數に身も弱り、病に責められて、日々に生命の縮むを、我さへぞ知るゝ思ひ迫りては、をり〳〵は、悲しき行末は見じ、世の噂に聞くなる悲しき人の跡おひて、我から生命を棄てんかと、物狂ほしき歎きもすれど、こは妻の道ならじ、我ありてさへ、今の如きに、無からん後は、如何ならん。さるに又、露のゆかりの結びたる、なつかしの和兒には、何とて離るべき、和兒よ父には似ざれ、父は我心ゆゑに、家を破りたまふとも、此子の代には、先祖の譽れを再び興さしめでは、世にも人にも、はた此家に對して申譯なし。さばかり頼める和兒の目のあたり、夫はあらぬ擧動を見せたまふは、堪へがたなの極なり。此子の行末や、さて如何ならん。彼を思ひ、之に煩ひ、かよわき女の心、責木にかけられて、一時に千絞の强問を受くるよりも、なほ苦しき思ひぞする。噫、さるにても、心なの我夫、少しは迷の夢さめて、一人の妻の歎きを聞きたまふとも、男心にさはりの有るべきにもあらぬに。この歎きは誰人にか訴へん、訴ふれば、輕んじまゐらするに當ると知れば、君より外に慰め受けんとは、さら〳〵思はじと覺悟せるを、君は哀れと思し召さずや。我の此家に娶られしを、昔の友すら、よき仕合せよ、玉の輿よと、羨むがごと、誹るがごとにいふもあるぞかし。我は刺の莚に坐すものを。あはれ我夫、妻はなほ生き永らへて、君が昔の情を、え忘れであることを、かりそめにだに、思ひ知りたまへ。

◎哀れなる子

我と二人の同胞とは、此家のいとし兒に生れしなれど、悲しきかな、などでかばかり幸薄くはあるとぞ。思はじと思へど、いたましきは、我母君の植根の朝貌、露未だ消えざる間に亡せたまひしとなり。母の棺を北山の苔の下に埋めまゐらせしときに、我等の幸も葬られたり。母みまかりましてより、三年の中に、父の我等に、母よと呼べと告げたまひしものは、七人までもかはりしのみか、今日この頃の父の心の苦々しさ。三人の子が盡す眞心の足らはぬゆゑなるべけれども、さても昔にかはる、つれなき御心や。さるに又たゞ一人の弟の、如何なる魔神にさそはれけん、柔和の性質なりしものが、荒々しくかはりて、學の道はよそになし、道ならぬ道にさへ踏み迷ひて、家の寶を竊に持ち出しては、悪所に棄つるより、父の怒りは一方ならで、いよ〳〵殘る二人を悪ざまに責めたまふ。心苦しさに二人が眞心こめて、弟を戒めしに、罪に溺れしものゝ、などてきゝ分くべき、遂には或はし多き都をさして、ゆるしを乞はで家出しつ。また妹のまだいはけなきながら、くさ〳〵の思ひやみに、身の春をもまたで、母の傍に去りしとき、我も共にと願ひしとても詮方あらず、なまじひに生きながらへて、孤り臥柴のこるばかりなる歎きを重ね、それさへあるに、行末かけて契りし人も、去年の秋、尾花が袖にまねかれて、かへらぬ旅に出立ちつ、いよ〳〵頼み寄るべき方もなし。幸の神には棄てられ、愛の神には見放され、たゞ此上は死の神の招がん日をのみ待つ外ぞなき。廣き世にも、我身ばかり、あるに甲斐なき人やある、ならば尋ね求めて、共に浮世を語りなば、些かの慰めともなるべきを。ア、去りにし人こそ戀しけれ。母よ母、など我のみ獨り此世には殘したまふ、かゝる歎をせよとてか。妹よ戀ひし、彼人もまたなつかし。あまりの苦しさに身は衰へ、今は頼み少き病の床に、打臥して、熱に浮かされては、母よ妹よと呼ぶ時は、はしたなしとて、父の叱りを蒙れど、我は一時も早く慕しき人々のいますなる黄泉の國にぞゆかまほしきものを。

◎姑の心

わくらはに、遙々國許より上りたまひし姑の君なれば、嫁が

斐に、心を盡してもてなし參らせ、珍らしき馳走をも備へ、また見馴れたまはぬ都の上野、淺草、はた芝居などに誘ひまゐらすれば、定めし喜び給はんと思ひの外、かやうに嫁の贅澤にて驕りに長ずればこそ、我子は、なりはひに追はれて、我への貢きも少きなりと、當てつけがましき苦言を囁きたまふ。さらばとて、少しにても待遇を怠りなば、嫁の分際にて、姑をおろそかにすると腹立ちたまふ。あゝ、さるにても、測り難きは、姑の君の心かな。

◎人の子

素より我兒といふものなければ、その愛らしさを知るによしなし。さりながら我には愛らしさやみがたき、一人の幼兒あり、情厚かりし人の忘れ形見にて、或時暫くは、共に一つ家に住まひしこともありしかば、我もなつかしく、彼も親しみ、其親しむにつけて、いよ〳〵捨てがたくなりまさり、折々其家を訪らへば、我影を見るや、たゞちに、兩手を打ち振り、あどけなき聲して我名を呼び、膝にかきつきなどし、また離れてあれば、さゝやかなる手を額のあたりに上げて招き、共

に遊ばんといふなど、其愛らしさ堪へがたし。我とならば何處にも伴はれて行き、我もまた此幼兒を連れて遊山などするがうれしく、或は手を引き、勞るればかき抱き、共に車にのぼれば餘念なく打眠る。道行く人のなにとて可愛らしき子よといひて振かへり見るがあれば、我も嬉しく、知らぬものは我兒なるべしと思ふべけれど、それも樂しく、此兒の爲に、子煩惱といはるゝもいとはじ、之をし見れば、日頃の欝も暫くは忘るゝものを。此兒を我子として育つることをえなば、如何ばかり樂しからん。此兒の爲ならんには何物も惜しからじ我子ありとても、かばかり愛らしかるべきやと思ふこともあり。さりながら、また、今はかばかり我に馴染むなれど、若しも二年三年別れて後に逢ふことあらん時には、我を忘るゝことなきや、年長けたらん時には、我に親しみしことを、うら耻しく思ふまじきかと思へば、心地おだやかならず。されば親達は、兒の早く生ひ立たんことを望むべけれども、我は此兒の、いつまでも、今の儘にて、其あどけなさを失はざれと希ふは、これなほ人の子なるが故の思ひにや。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

少女子よ

花影子

しこ草いともはびこりて、
　たどる路なき荒野原、
迷ひまよひて往くひまに、
　我身もたまもつかれはて、
憩ふほとりに花すみれ
　情の露にあふれつゝ、
我を見あげてほゝゑみぬ。
　あゝなつかしき少女子よ、
　君は浮世のはなすみれ。

急ぐとすれど日はくれて、
　やどる家さへなかりけり。
みちはさかしく岩おほし、
　曇るまなこを拭ひつゝ、
わづかに空を見あぐれば、
　やさしき星はまたゝきて、
愛の光りをおくりけり。
　あゝなつかしき少女子よ、
　君はやみ夜の星のかげ。

たけるはやちに山をなす、
　波にまかする沖のふね、
檣たふれ梶をれて、
　いまか沈むと思ひしに、
昔ユダヤの湖水を、
　しづめたまひし神の子の、
み聲のごとき聲きこゆ。
　あゝなつかしき少女子よ、
　君はわが世の救なり。

日もはや西に傾きて、
　入相つぐる鐘のおと、
憂事のみのおほかりし、
　今日も暮れぬとひゞきけり。

黄金さしける大空は、
　天津みくにを忍ばせて、
小川の琴はわがたまを、
　清きねぶりに誘ひゆく。
あゝなつかしき少女子よ。
　君はわが世のゆふまぐれ。

塵より出でし　身のなくば　おなじく

塵より出でし　身のなくば
　月となりても　窓にさし
君かねがほを　てらしつゝ
　清きゆめ路を　まもりてむ

塵より出でし　身のなくば
　我は櫻の　花とさき
君がえりにも　さゝれてむ
　綠のかみも　かざりてむ

塵より出でし　身のなくば
　かをりをつゝむ　露とおき
君の花をば　手折るとき
　纎きゆびにも　したゝらむ

塵より出でし　身のなくば
　清きいづみの　水とわき
玉の肌膚も　洗ひてむ
　花のくちにも　すはれてむ

塵より出でし　身のなくば
　心を春の　なよ風に
まかせて君が　くもりなき
　情のそのに　かよひてむ

日記抜萃

昨年より日記を試み、古くより考へ居るを、又は新しく思ひ出しとを、時に觸れてかい付けしが、左は其中よりの抜萃なり。文章のむき出しなるは日記ゆゑと許し玉へ。

泡鳴子識す

◎夫妻本是同林鳥、巴到天明各自飛。……女をつとに後れては、鬼妻ともいふは亡者の妻といふ心なり。然れば此處を思ひて夫ら一入憐むべきなり。然れども女は生活の業を知られば、或は親の志に從ひ、又は子の不愍さに引れて、心の外に兩夫に見ゆるものあり云々(英草紙にあり)。

◎進歩と保守と相爭ふや、後者は前者を止めんとして、時の政府を栖に取ると常なるが如し。鳥居燿藏澁川六藏等の華山長英に於ける、既に然り。先々月なりしか、時事新報と朝日の杉浦氏と相戰ふ。杉浦氏結論に至り、臨濟流の說はもとより其筋の許さゞるとといふ。氏も亦政府の巾着たらんとす。

◎十五夜、月よし。獨り椽がはに坐して、「名月や竿一本の梯立てり」といふ句を案ず。

◎老子第七十七章「有餘者損之、不足者與之」と、聖書の「貧しき者は幸なり、飽くとを得べければなり」と。最も理想的にして最も實際的の言なり。

◎或友人の書簡に「平和でなければ進歩的でない」とありしが、之は眞に平和なる人の思想なるべし。海に涙なくして潮はれり來たる。然れども一個人に取ては一短時期のみ、然らずんば天地の全體に於ていふべき言なり。進歩といひ、進化といふもの、決して一直線には非らず。その實際はあちらに當り、こちらにぶつかりて變じ行くものなり。天に在ては屈曲すると電光の如く、地に於ては化生すると毛虫の蝶と成るが如し。

◎境目の飄簞とはどちらにも付かぬインヂフエレントなるに譬ふ。我國の諺を外國人より教へられし愚さよ。

◎人類教育の楷段に三級あり。、期望の時代　疑懼の時代、自覺の時代、是なりといへど、われ一個の歴史にも既に此三楷を通りぬけたり。然りと雖ども、悟るは迷ふの初なれば、此三期は常に循環して、わが心絶えずわか〳〵しきを覺ゆ　也

◎魯國の虛無黨、佛國の社會黨、英國の職工黨、清の哥老會。

◎神を思想なりとせば、吾人も亦思想となつて是に合體するを得べし。而して凡人は賢者の思想に入りて、また神と一体たるなり。(賢者といふも、其上の者より見れば凡人なり)。之に依て吾人は小乘佛敎の所謂身心俱滅、即ちペルソナリチイの絶滅に歸するや否や。余は絶滅に非ずといはん。思想てふものゝ性質上、個と全とは別ありて又一なればなり。

◎美濃國(その他も同じからん)などにては猪が多く連立ちて山を出し跡あらば、二三日の内に必らず雪降るといふ(これは新居の老差配の言)。

◎樹立のかげより十五日の月に向へば、轟然として遠く滊車の過ぐる響あり。居を移して始めて一種の靈氣を感ず。

◎砂村火葬場にては、火葬料上等七圓、中等三圓、並等一圓八十錢。小兒は等に從て額を減ぜり。煉化のかまどは左右各々十個程相對して並び、之を並等とす。上等は奥の正面に一個あり、その左右に中等二個あり。棺を納むれば忽ち鉄戸の錠をおろし、鍵は之を依賴者に渡す法なるが、夜に入て、かまの後ろの穴より火を燃けば、煙は釜底の穴より地中の道を傳ひて、高き煙突に出る仕掛なり。余の建物に入るや、一人の男車のつける臺にわが祖母の棺を載せて推し行き、釜の前に至り、之を入れながら曰らく。人の骨も節々のつぎめが離るれば、粉みじんに碎くるものなれど、火の工合に依れば殘る骨もあり。第一に足首、背骨、あたまの骨なれど、大体は推量しても、こゝは何處の骨の灰なるか知れるものなりと。此男の白ずみたるハッピを着て、始めて奥の方よりいで來れる時より、何んとなく地獄の使の如く見えて、あたりより臭きにほひせまり來りたり。われは此男の言葉を聽き、ハムレット五幕目の墓所の場を思ひ出でぬ。

◎今朝の霧甚しく、木の葉より滴る露の音、雨かと疑かれたり。

◎たんせきの藥には、大坂東區伏見町二丁目堺筋西へ入る赤心藥舗谷某方の吐根散をよしとすといふ。

◎霜は今朝を以て始めとす。庭前の蕎麥の花之が爲めに萎みたれば、今年の收穫おぼつかなしといふ。

◎宗教家は多く世の中に對比して、未來の幸福を說けど、直に未來のとを說くは

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

恰も古昔の思想に從て、天の使又は惡魔といふ想像物を、見えぬながらも實形あるものゝ如く說くに等しくして、新思想を有する者には何の効力もなきなり。死後の審判なる觀念は莊嚴には相違なけれど、たゞ良心の責を表する最高の模型に過ぎず人心の機微を一層緻密に啓發せば世の中にありて世の中ならぬ立場を發見せん。これ新宗教の依て以て立つべき所。或人等の所謂社會的宗教、科學的宗教などには非らず。開展せば燦然たる星の如く、密閉せば陰々たる黑雲に似たり。余はたゞ美の方面より之を觀ぜんとするものゝ如し。永遠不死とは未來をいふに非ず、今世の今日既に吾人の得べきものなれば、生死の如何に依てその有樣を異にするをなからん。

◎二年子大根、冬菜、豌豆、そら豆等の種を播く。豌豆そら豆などの種は、一づゝ離して播く時は、萌芽遲しといふ。故にそら豆を二づゝ、えん豆を五六粒づゝかためて播きたり。

◎貞操とは唯、貞婦兩夫に見えずといふ位の言葉を以ていひ露すと能はざるなり夫死妻再び嫁せざる、眞の道德上何程の價値かあらん。妻たる者夫の有するものを以て滿足するこそ、最もその精神の高尙なるものなれ。

◎つくしのたけたるをつくしのお叔母さんといへど、また杉菜ともいふ。その根は龍宮迄もとゞくといはれて、一丈堀るとも、二丈堀るとも、土地のよろしき程深くはびこりて限りなしとぞ。

◎芝生の上に橫りて書を讀む。秋のとんぼ來りて書の一端にとまれり。あはれ、世の外なる天使。

◎或友人のもとに耳療治の爲め田舍より來れる女の子あり。簞笥のかげに跪いて默せる故如何にせしと尋れば、神に祈禱せしと答ふ。何故にと問へば、國へ歸りたければ早く耳をなほして玉はる樣と答へぬ。斯る無邪氣のいのりこそ、純粹の心より出るならめ。わが如くひねくれては、何事にもまとり氣なき所を示すを能はず。

◎或教會のクリスマスの夜、居殘りて世話役などの話す所を聽く。一老人（名ある人）當夜の費用の殘金一圓あるを以て、斯々の用に供せんといふ、其は此頃會堂の窓に石を投ずる者あるが爲め、每日會堂の橫町に集れる車夫等にいひ含め之を捕へし者には一圓を與へ、其惡戲者の名を敎へしものには五十錢を與へん、と約束するをなり。側に在りし外國の老教師之を聞き、そは善き策なれど、もし車夫が互に申し合せ、僞りてその友人を捕へ來たるとあらんといふ。一坐大笑。いづれも老人は老人らしきとをいふものかな。

◎如何に不別嬪でも、女性はどこかに愛嬌あるものなり。

◎クスリチヤンの保險傳道よし。クリスチヤンの實業神學よし。クリスチヤンの番頭說敎學よし。然れどその通がるには厭味あり。その追從法未だ垢ぬけせず。

◎わかき婦人よ夫の心を慰むる丈汝の心を脩練すべし。

◎また居を移す。新居の向ふに小き村小學あり。敎師は八十に二三歲足らぬ老人なり。今夜尋れ來りしが、そのいふ所を聞けば、是に敎師たると既に十九年。その以前も同じ職にありて、小學校の元祖（いづくを範圍として、か明ならず）なる由姓を田中といふ。その耳既に聾せり。然るに尙、五組五十人內外の生徒を一人にて敎ふるなり。

◎父の家に使へる下女、暇を取りしとて尋れ來たる（彼女は人の家中を奇麗にみがき立つれども、おのが身の掃除を好まぬ者なり。）

◎雪達摩をつくりて小兒に見せたり。

◎子供のうまく時代も面白きものなり。わが子は朝早く起るや直にうまくと叫び、泣くにもうまく、泣き止むるもうまくなり、だかるにもうまくなり而して牛の啼き聲を眞似てうまといひ、母の鼻を指してうまといひ、三日月を仰いでうまといふ。寐言にもうまくをいひ、時には猫の聲を爲してなあといふなり。

◎一言一行は勿論、一思想と雖も、一たび起れば宇宙に永久の波動を與へづゝあると、思想する者の常に感ずる所なり。所謂未來の念は即ち之を以て證するとを得べし。

◎日本人を敎るには、先づ何事にも運命（fate）といふ事をいふ習慣又は思想を改めざるべからず。婦人は更に之が爲めに無意志の動物にて滿足するなり。西人は天命（destiny）を謂て、運命をいはず。故に或人は「仕方がない」といふ語意は、日本に來りて始めて知るを得たりといへり。

◎田を隔てゝ向ふの高地に見ゆる家あり。その以前の主人は藝者買を爲して財產をつぶし、今は橫濱にて楊拾ひを爲し居る由。その遊びに夢中なるや、遂に身づからその愛妓と共に藝者屋を開きしが、お客の來たる每に主人がりん氣するによ

り五十錢を手切として共に追出されしとなり。
◎薔薇櫻なつ／ろひつゝふあれは薔薇の樹、四番はその枝なり

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

り五十圓を手切として終に追出されしとなり。

◎葡萄棚をつくろひつゝ「あれは葡萄の樹、留吉はその枝なり」の句を思ひ出づ。

◎我國人を大體より觀るに、未だ物質外、無形的、思想上の消息に通ぜざるなり。たとへば、テニソンが一字一服の風、ロングフェロウが一句一杯の習を聽て、忽ち歐米人の認識する飲酒喫煙の弊害を顧ず、横濱神戸あたりの外商等が花街遊里に彷徨するを見ては、直に存娼の恥づべき制度なるを忘る。甚しきは外交上、諸强國の饕食奪略に眩惑し、この諸國と共に斯る勢力、決心の由て來る根底を同うせんとを務むべきを知らず。見よ河流の上層は常に輕く流れ行くとも、下層の水は滿潮に從て徐ろに推し寄せ來たるとあるを。外形の實力、最後の賴に非ず。嗚呼澆信の世なる哉、澆信の世なる哉。獨り得々たるは櫻の花。

◎また居を轉ず。この度は街巷に出づ。嗤われ時と共に涙涙す。

時文

◎農家の細君　池田商店版

農家の主婦たるもの、爲に、同事万事の心得を說くものは、此書なり。婦道、家政諸般の注意より、出產、育兒、教育、養蠶養鷄農業、料理法、看病法、素人治療法など細大漏れなく說述せり。

◎新小說　第三年第六卷　春陽堂版

本卷所載の小說の、小杉天外の「かこひ者」これは、裸體畫、自殺といふ、奇體(奇想とはいはじ)事を種にして、作り事をした趣あり。佐藤迷羊の「谷間がくれ」は破胸女子の末路を描きしものなれども、あまり引立ぬやうに思はる。雜錄、時報其他例の通り讀むべし。

女學文壇雜俎　（本號〆切まで）

◎女子教育の主義（淸浦奎吾）　教育時論第四百六十九號
◎フランセス、ウヰラード孃（山路彌吉）　婦人新報第十二號
◎女學校の失態　女鑑第百五十六號
◎兒童談　中央新聞五月十日以後
◎高等女學校の設立に就いて　北海道教育週報第百八十三號、
◎婦人問題（高島平三郎）　日本主義第十二號
◎世界に於ける女子の社會的地位　天地人第五號

片々

◎婦人と殖民事業　婦人の移民事業に於けるや最も大なる關係あり。婦人の慰めなく、從つて家庭の樂なくんば、男子の殖民遂に其堵に安んずると能はず。英國の殖民が常に成効するは、彼等が家庭を提くるが故なり、佛國の殖民が一々失敗するは之に反するが故なり。我邦の殖民の長つゞきせざる事また佛國人の如し。嘗て榎本子爵等の墨西哥殖民事業の成行を聞くに、これまた家庭の樂を欠くが故に、大したる成効なしと。婦人の殖民地に於ける此の如くに必要なりと雖も、扨彼賣淫婦の如き到處に毒を流すものは、却て大害を來すを以て、之を遠くると共に勉めて、善良なる婦人の續々として北關南門の新開地に移殖し、有爲の男子を助けて、事に國益に從はん事を奬勵せずんばあらず、吾黨は實に屢々之が爲にいへり。此頃千島報効義會が、初めて六名の婦人移住者を得たるを聞き、同會の爲めに之を慶賀すると共に、聊か以上平生の所感を述ぶ。

◎女學校に對する惡風聞　一方に女子教育の盛なるにつれて、之に對する惡風聞の傳はるは、勢の自然なるが、此頃東京外二三の地方の女學校にて面白からぬ風聞あるを耳にす。彼東京府高等女學校の校長轉任事件は、教師間の軋轢の延いて生徒の同盟運動となりたる結果と傳へ、共立職業學校生徒教師が依托品賣行よきより職人根性を起し、贅澤に流れ、其弊の造花科に於て最も甚たしといひ、また長野縣尋常師範學校女子部にては、教師生徒と共に花見の節、花下に手を連れて亂舞したりといひ（これ恐らくは西洋ォニゴト位を遊びしならんを見るものゝ惡口したるならん、業々しく傳へるは却て可笑し。）また宮城縣師範學校附屬高等小學校女生徒入學の節之を赤裸にして、體格檢査を行ひたりと噂す。以上四件の如き

新聞假令ひ、之を大事件のやうに傳ふるとも、其實は、些細の事なるべく、また惡意者の譏口に出でたるとなるも計り難し。吾人の如き之を聞いて、徒らに慣慨するが如きをなすものに非ず、またかゝる風聞ありと傳ふるさへ馬鹿々々しくは感ずれども、なほ且つ女學界の輕擧を戒むるが爲に之を記せり。

◎裸體畫遂に禁止せらる　裸體畫の是非論も、既に下火となりたるが、不相變其實行はよかりしといふなるに、近日内務省は突然風俗壞亂の故を得て、裸體畫を掲載したる新著月刊の各號、並に大阪万歲新聞其他の新聞雜誌を一網打盡して、發賣を差押へたり。美の粹といふもの、また世に顏出しのならぬものなりたりあはれ／＼。

◎豐前小倉　に藝妓學校あり。科目中には脩身科もありとか。此程其進級式に警察署長、郡視學等も臨席せりとか。藝妓株式會社なる世の中。藝妓學校ある何ぞ怪まん。官人の臨席も然るべし。追ひ／＼には、吉原に娼妓高等女學校起りて、開校式に文部大臣女德の演說をなすの日の無しとも限らず。

◎二月中　の東京府下十五區に於ける結婚數は七百十六、離婚數は百九十六、即ち結婚に對する離婚は三割六分。また同府下出產三千百五十四人、死亡千七百九十五人、

時報

◎婦人報効義會に入る　郡司大尉等の千島報效義會は創立以來婦人の入會申込は絕て無かりしが、今回兵庫縣但馬國美方郡村岡町士族美濃部リン（二十五）兵庫縣播磨國佐用郡乃井野村士族塚田アサ（二十）大阪市南區高津町三番町林ウタ（三十）廣島縣備後尾の道字上新町村上トク（十六）兵庫縣津名郡千草村字小百井矢代ヨ子（十九）京都府紀伊郡東九條藤田すゑ（二十二）の六名は、各父兄の許諾を得、報效義會に入る事となり、五月六日同會員川口甲助氏に伴はれ占守渡航の途に上りたり。一行は十日頃函館より軍艦武藏に便乗し北航する都合なりと云ふ。

◎地方女學校卒業式報道補遺

●秋田縣師範學校女子部卒業式　は三月二十五日擧行、卒業生十六名。

●富山縣師範學校女子部卒業式　は三月三十日舉行、卒業生十四名。

●京都府師範學校女子部卒業式　は四月一日擧行、卒業生十四名、中保姆傳習修了生二名

◎山形縣高等女學校　同校は五月一日より開校の筈、入學生徒は開校以前にて凡百二十名の見込なりし由。

◎香蘭女學校卒業式　東京麻布區長坂町なる、同女學校にては、五月十一日午後一時半より第五回卒業及び第七回進級證書授與式を擧行す。

◎小倉高等女學校の事　豐前小倉町外四ヶ村學校組合會にて、本年度より小倉町に高等女學校設立の事を決議せしが、其後郡長より直に文部大臣に設立許可を出願せしに、今に何たる指令なきより、今日迄開校の運びに至らざる由。而して今全校組織の大要を聞くに、校舍は當分の內小倉高等小學校增築教場の空室を以てし、業脩年限は三年とし、課程は普通教育及裁縫、活花茶の湯、諸禮式等女子適切の課程を教授し、入學生徒の資格は高等小學校卒業と全等のものを入學せしむべく、職員は校長一名教諭一名〔女子高等師範學校卒業生〕助教諭〔尋常師範學校女子部卒業生〕其他裁縫、活花茶の湯禮式には各專科の教員を聘用する由にて、校長は現任小倉高等小學校長杉山貞氏兼任さるべく、教諭助教諭等も略內定し居る由。又教場諸器具等も夫々準備中なれば、其筋の許可あり次第に開校すべき筈なり。本年度入學生徒の數は七十名の豫定なるも、全校は元と小倉町外四ヶ村立に係るも、他町村又は他郡市よりの志望者も入學せしむる筈なれば、豫定員より多分增加を見るならんとの事なり。（門司新報）

◎東京府高等女學校　全校は明治二十二年に創立し、二十四年三月第一回の卒業生を出してより以來、今年十二回の卒業生に至りて總數四百二十五名あり。中、師範もしくは補習科を卒業せし者二百四十名なり。又本年入學生徒は百三十餘名の募集に對し、二百數十名の志願生ありしが、その中、二年生百三十二名、三年生七名、四年生一名、併せて百四十名の入學を許し、去る七日該入學生および、その父兄保證人を集めて入學式を擧行したり。また先日同校長岩谷松太郎氏は大阪高等女學校教諭に轉じ、東京府師範學校長田中敬一氏當分假校長なり。

◎仙臺の養蠶　仙臺有志貴婦人等の組織に係る同會にては、四月廿三日午後一時より細榮會を東二番丁五城館に開き、春季養蠶飼育上に關し協議を遂げ同會卒先して發蠶をなし、民家各戶に摸範を示すよし。

◎貞教員　神奈川縣青木元町なる田原秀誠と云へるは、本年五十三歲にして性質溫厚篤實同地小學校の創始より同町なる小安小學校に教員となり、爾來二十八年、一日の如く勤續して子弟の教育に怠らず、此の薰陶にて人と爲りしもの尠なからざる有樣なるが、氏は慢性脊髓病にて是迄とても數度休職の止むを得ざるに至りしも、敢て一身を顧みず勉勵したる爲め、同地の有志者其高誼に感じ、三回に數百圓を贈りしに、此程愈々病重り到底職に堪へざるに至りたる爲め辭職したるを以て、氏の薰陶を受けしもの及び有志者より金三百圓を贈り、氏の功勞を表彰したりと。（報知新聞）

◎孝女受賞　米澤市の竹津やをは今般左の賞を受く

山形縣士族竹津高融妹

竹津やを

天性溫和孝養の志厚く父高齡にして久しく中風症に罹り兄亦氣[illegible]の病[illegible]

に際し百方看護を竭し[illegible]

天性温和孝養の志厚く父高齢にして久しく中風症に罹り兄亦氣鬱の病を患ふるに際し百方看護を竭し一身家事を搊理する事爰に十餘年洵に奇特とす仍て其賞として金二圓下賜候事

明治三十一年四月廿七日

山形縣知事正五位勳六等　押川則吉

◎二組の孝貞夫婦受賞　今回富山縣知事より褒賞されたる二組の孝貞夫婦は左の如し。

（其一）

岡山縣都宇郡茶屋町大字早島新町植野久米吉妻　橋本事

資性柔順養父母及び夫に事へて孝貞の志深く曾て植野利衛の養女となり能く家風を守り明治十年以來養母の病褥に在ること前後十有年加ふるに其間養父の病氣に遭遇し家計困難の中に在りて克く夫を輔け共に看護に心を盡す其行爲の厚き玆に二十年餘志操一日の如し洵に奇特とす依て爲其賞金　圓下賜候事

同縣都宇郡茶屋町大字早島新町　植野久米吉

天資溫厚養父母に事へて孝養怠ることなく曾て植野利衛の養子となりて克く一家を齊へ明治十年以來養母の宿痾に在ること前後十有二年加ふるに其間養父の病氣に遭遇し家計困迫の中に在りて看護を盡し就中妻と共に力を協せ藥餌其他の佳味を供し養父の亡歿に臨ては其吊祭を重んず其行爲の深き玆に二十年餘志操一日の如し洵に奇特とす依て爲其賞木盃一組下賜候事

（其二）

同縣邑久郡福田村大字福元　福間惠三郎

資性篤實養母に事へて孝養曾て該家に入夫する妻房の姑に事へて至孝なるに感激し夫妻心を協せて益孝養を竭し常に家計の困難を忍んで專ら家業に精勵し養母九十二歲の高齢に達したるを慰し日夜看護に怠らず其行爲の深き玆に十有六年志操一日の如し洵に奇特とす依て爲其賞金參圓下賜候事

同縣邑久郡福田村大字福元　福田惠三郎妻　房

天資柔順常に能く姑夫に事ふ曾て前夫の病褥に在るや家計の貧困を忍ひて看護に怠らず其死歿に臨では吊祭を重んじ爾來專ら家業を勵み傍ら生活の餘資あれは悉く姑を慰撫するの資に供し今や姑の年齒九十二歲に達し起臥進退自由ならざるべきを悟り日夜看護に心を竭し其行爲の深き玆に二十有六年、志操一日如し奇特とす依て爲其賞金五圓下賜候也

◎美談數件　女敎師の美談東京芝區桶繪小學校元女敎師大久保梅野子生徒愛撫の事（讀賣新聞四月廿五日）◎孝女老て益々壯なり備後福山西町中之町安藤誘母ヨシ（備後日報四月三十日）◎孝行なる夫婦高知縣土佐郡森村字柑川上田伊八其妻春の養母に孝養を重くす事（土陽新聞五月六日）◎貞女岐阜縣郡上郡北濃村大字二日町匠の大工職村上淸八の妻トヨの貧苦の中に二子を育てつゝ、失踪したる夫の行方を尋ねる事（濃飛日報四月廿八日）◎感ずべき貞女高知縣幡多郡沖の島村字母島安本喜三妻イシの病夫に奉仕する事（高知日報四月廿九日）◎感ずべき生徒茨城縣多賀郡河原子町尋常小學校三年級生徒益子彌介澤畑虎雄の兩人の精勤勉勵の廉により郡役所より受賞せし事（茨城日報五月四日）◎感ずべき一家族博多市西門町佐野源太郎兄弟及夫婦の父母に孝養を盡し兄弟相愛する事（福岡日々新聞四月廿八日）◎節婦食を斷ちて亡父に謝す、帝國大學教授田中館博士の實弟亡甲子郎氏の未亡人ヘマ子の節を守りて夫の遺業を紹ぎ北海道を開拓する事（中央新聞四月三十日）

◎夏向流行の染　男女夏着流行品相塲はほゞ左の如し。女着は

一先つ重なるものは紋織御召及縞御召の類にて、單衣地として第一着心宜敷く、變りものにては漣織風織御召なるべし、尤も値段は紋織御召にて十四五圓位其他は十圓內外なり。

一絣り類も單衣用には至極粹なるものにて、結城紬の紺がすり及絹久留米を上等とし、薩摩、御所、久留米も不相變評判よろし。猶小供向には友染縮緬、御召類及久留米の蚊がすり等なるべし。値段は結城紺絣絹久留米は十圓以上十五圓まで、薩摩絣四五圓位御所、久留米は上等のものにて三圓までのものなり。

一單衣縞ものにては風通織、銘撰、節糸、壁糸、平御召、新御召、中形靑梅、玉川縮等、上下に通じて需要多し相塲は風通織十二三圓壁糸織十圓前後平御召十一圓位銘撰節糸四五圓位但銘撰紺がすりは五六圓前後新御召、中形靑梅、玉川縮は三圓迄のものなり尙千代田縮、柳川上布、玉川縮、晒縞などは盆、暑中の進物用には重寶なるものにて直段は五六十錢以上二圓迄なり

一薄もの地にては紋上布、本上布を最上とし、絹上布、越後上布、透綾、明石縮、壁上布、帷子越後、奈良近江等主なるものなり本上布は最上八十五圓より以下十五圓位まであり紋上布は十圓前後絹上布、越後上布、明石縮は八圓前後綿縞絽、綿絽中形は常衣に工合よろしく代價は二圓前後なり

一丸帶は縞絽、友仙絽、紋絽、献上朱子等にて直段十二三圓以上十五圓迄明珍單帶は十三圓前後なり

男着にては

一羽織地縞ものなれは秋田織、壁糸織、壁市樂、平御召、銘撰、節糸等にて秋田壁糸、平御召は八九圓以上銘撰、節糸は四五圓位薄羽織用には縮絽明石縮紗等

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

代價八九圓絹上布壁上布は三圓已上五圓前後無地ものにては絽斜子にて黑五ッ紋も目下流行せり
猶縞染絽單羽織は至極徳用にて直段九圓位
一縞御召壁市樂、壁糸織は單衣ものには最上にて直段十二三圓位結城紬は十圓前後其他は前述の結城紺絣、絹久留米にて銘撰節糸は大凡五六圓位絹セルば富岡絹糸紡績にて織上げたるものなるが紳士向には至極重寳代價は五圓より十圓位までなり
一帷子地にて本上布は申す迄もなく越後縞及絣奈良縞八重山上布、芭蕉布等大に好評
錆縞越後ら昨年來大に流行せるが直段は三四圓より十圓なり奈良は二圓前後まがい越後は直段二圓位にて一見正眞越後と差別なし進物用にはよろしかるべし
一帶地にて絽袋織、綴織、和蘭織等は已に世に高評あるものなるが其他博多袋織紋博多、三ッ折博多等代價十七八圓より五六圓まであり猶白縮面兵兒帶はメ加減宜敷品は七八圓の處なるべし絹紬の兵兒帶は昨年來大に流行せるものにて代價一圓以上二圓までにて手に入るべし。(以上國民新聞)
洋傘流行は昨年と大したる差異なし。直段は凡そ去年よりは一割高位なるが、他物價の騰貴に比しては安き方なり。女持は中張といひて深張よりはやゝ淺き方流行し始むるが如し。舶來よりはいづれも中張なり。
帶締は本年も一頃廻はしの結紐依然として流行す。色合は利休及び金茶を最とし小豆色、淡紫、紺色等之に亞ぎ、子供の分は矢張り緋色、今紫、藤色等多けれど華美を好みて染分、若くは段染の類賣行き多し。又上等品と稱せらるゝ舶來金銀モール組交ぜの品の中流行の一二を舉ぐれば、黄金模樣は舶來不變色金モール入り染分けにて、中はバラ絲、左右は各々八寸許りづゝ金モール入りの模樣打にて兩端を都打結びにしたるもの、代價三圓位、彌生締は三段染分模樣打にて、一面は中形高麗模樣入り兩端を源氏打結びにしたるもの代價一圓四十錢、曙締は三段ボカシ中バラ、兩端都打結び代價五十錢より一圓二十錢迄、ユカリ締は三段染分丸打組、中は四ッ打白の部分は悉くバラ絲にて兩端を新旭打結びにしたるもの代價八十錢より一圓迄、立田締は平縮打にて白の綫を取りたる惣小町にて頗る高尚の者其他丸打類は相變らず年增向きに流行するよし。又近來發賣になりし舶來金銀モール入りは色も褪めず、配合も好く頗る評判よく、金物附も桐箱入にて體裁頗るよく進物用にしては嵩ばらず至極適當の品なりといふ。(以上時事新報)

◎海外世界

◎世界第一の壽老婦人　世界第一の壽老人は、佛國ハウテマリー縣のアウベリー村に住むマリーヅーランと呼べる婦人にして、千七百六十年九月二十二日初めて呱々の聲を舉げ、今年百三十八歲の高壽に達したり、同人は元氣未だ衰へず兩頰に皺の跡を止めず、能くナポレオン一世を知りて彼は偉大なる軍人なりしが又大逆賊なりしとの實驗的評語は屢々老女の口より溢れ出るといふ。(中央新聞)
◎米國婦人の日本服　米國にては、近頃婦人間に日本服を着すると流行し、終日身體を勞して後休憩する時又は湯上りの時などには、殊に之を着用するの風盛なり。既にニューヨルク交際社會の首領と稱せらるゝ婦人等が去る二月の頃宴會を催せしに來會婦人は悉く日本服を纏ひ、其光榮頗る奇なりしかば、種々の批評出でたる爲に、其後宴會には之を着するの風やみたれど、室内にては依然之を用ふるなり、但し紐を左にするは奇体の觀あり。
◎寡婦の大學寄附　米國ワシトン府のウイリアム、ベルテン、ノーブル夫人は、亡夫の紀念の爲、ハーバード大學に一講座を設けんが爲に二十万弗を寄附したり。其亡夫といふは十有餘年以前大學を卒業したるものなり。
◎ウイラード紀念卒業式　米國アラバマ州リビングストン市アラバマ女子師範學校にては來る六月の卒業式をフランシスウイラードの紀念卒業式として、卒業生二十名をして、この偉女傑の性行を記臆せしめんとて、同校長はそれが爲に、同女史生前の傳記につき、矯風會本部へ問合せたり
◎日本の矯風教育とハント夫人　近着ユニオン、ジクナルの記する處によれば、米國の科學的矯風(禁酒禁煙)教育顧問メリー、エウチ、ハント夫人は、日本の公立諸學校に科學的矯風教育を普及せんが爲に、切に同國より招待を受けたり。其招待の主旨とする處によれば、ツイ此頃までは此等學校の上に大權を握れる文部大臣は排外主義の人なりしかば、迚も此事業を行はれしむるの見込なかりしが、前大學總長濱尾新氏は此度同大臣の椅子に就きて、而して泰西の風習及教育を輸入せんとを甚だ希望せるを以て、爰に此事業の爲に門戸は開かれたり。招待者等は諸學校に用ゐべき矯風的生理學教科書を要求し、また運動の主任者あらんとを欲せり。ハント夫人は内國の事業多忙なれば、今年の渡日は覺束なし云々と。之を記すもの何ぞ知らん、濱尾既に去り、西園寺之に次いでまた去り、文相の椅子早くも三たび主人を代へけるとを。また彼招待狀を發したる人は誰ぞや。
◎ラマバイ女史の事業　多年印度の寡婦救濟事業に盡瘁せるラマバイ女史は近頃米國に往き、去る三月十六日ボストンに開けるラマバイ協會の年會に臨み、報告を爲せり。女史は十年前米國に往きし後、今日迄其事業に寄附せられし金八萬弗に達す。其中五萬弗は基本財產として確實なる物品を購入し、必要の時は直に同價格を以て賣拂ふを得べし。且つ女史の盡力に依り救はれたる印度寡婦は、既に三百五十人あり。各學校教育を受け、或は既に幸福の結婚を爲せるあり。尙教師及び看病婦となりて働けるもありと云ふ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

◎緊急廣告

地方難患者を救助せんとする高僧各位及諸貴希望の諸君は金五圓以上御送金の上至急御申込あれ
本舗に相當の良法を以て一時施藥若くは特別割引の上將來永遠に御家督と相成候樣御相談に應ず

●十三年の疝氣 速康散三廻にて全快

拜啓拙僧義は十三年前より疝氣病にて種々藥用候へ共快方に至らず殆んど持病同樣に相成困難致し候處昨年中より新聞の廣告を見て速康散三廻り分則ち六十六服を服用せしに十三年の病廿一日に全快致し實に歡喜に堪へず是れ全く貴店御製藥速康散の恩惠と深く御禮申上候就ては全快報恩の爲め貴家の先祖庄左衞門殿法名此狀着次第御報知被下度當寺本尊前にて七日間別時念佛報恩仕度此段御禮旁申上候

三河國東加茂郡築羽村大字槇本舊常福寺 **中根志道**

久保田庄左衞門殿

●子宮病血の道患者禮狀

前略私母儀昨年十一月頃より子宮病に罹り四方の醫師に係り種々服藥充分に養生致し候へ共更に其効なく殆んど困難仕り候處當地函館新聞に速康散の効能あるを一見仕り貴家御製藥速康散御送付に預り正に拜受仕り候右病者へ服用致させ候處一廻りにて全治仕り實に高名なる速康散の効力には驚入候依て今又三廻り分御注文として代金郵税共金壹圓八錢別紙郵便爲替を以て御送金申上候間何卒此書着次第御送付被下度右不取敢御禮申上候早々不一

北海道渡島國上磯郡上磯町字下町 **種田富太郎**

久保田庄左衞門殿

拜啓貴館各位益々御清福奉賀候陳ば再三再四御遞送に預り候御製藥速康散は「金子せき」と申す婦人子宮病血の道にて服藥致すこと已に七廻りに及び一時は親類故舊等相招き今世の離杯迄致せしに貴藥服用の効に依り今況の處では全く快方に赴き手の舞ひ足の踏處を知らず實に他人ながらも悅び候情況故今三廻りの御送付に預り度不取敢郵便小爲替にて金壹圓八錢送付候間至急御遞送被下度此儀特に御禮迄如此に御座候早々不備

島根縣石見國那賀郡跡市村 **伊藤徹照**

久保田庄左衞門殿

如此實驗諸君の禮狀山の如し一々枚擧に遑あらず

此速康散は一名そげぬき藥とある故世間往々脹滿脚氣子宮病血の道リウマチス等に効能の有無御疑ひの方なきにしもあらず然れ共右の如く既に數年來難治の該病を全治ならしめたること數千人事實は本家に來り患者諸君より送付せられたる謝狀を見られ尚ほ疑ふ人は先方へ照會せられよ藥價は二日分拾錢一廻參拾五錢三廻り壹圓四十五日分貳圓十廻り分參圓で名高い藥店に皆有ます遠國の注文は六廻までの價八錢で小包郵便にて直ぐ送ります▲近頃にせ物あり本家久保田名義と雲形に久の字の商標に御注意下されべく候

京都市西洞院通五條南入小柳町

速康散本家 **久保田庄左衞門**

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

●肺病快癒報知

拜啓拙僧儀先年來肺患に罹り轉地療養又は東山醫院へ入院し其他百方治療に心を盡し候も更に効驗なく最も出家の身なれば素より神命を惜むに非ずと雖も病苦に堪へ兼且つ職本校の教員にあるを以て快方の後は教務に力を盡さゞるを得ず依て日夜苦慮の折柄六神丸の肺病に功能を奏し病者快方の謝狀各地の新聞廣告に散見するも半信半疑未だ該藥に信を置かざるも試驗藥として客月貳拾粒を購求し日々服用するに未だ半數に至らざるも病患は日中氷の解くるが如く頓進に快くなり此の勢を以て進まば十日を出ずして全快すべし實に神丸たる名稱に背かず候

賣藥と云へども一槪に見捨るものに非ず玆に貴店に謝し併て該藥の實功あるを證明す

ありがたや六神丸のきゝめにて
法の教ゑを傳へ得るなり

明治三十一年三月三日

京都東山知恩院内寄留
淨土宗學分校
三年科教員　谷川正道　㊞

龜田利三郎殿

●胃病患者六粒にて全快

拜啓私儀久敷胃病にて困難致居候處豫て貴店眞正六神丸は有名なる靈藥なるを承り居候に付早速御販賣店泉氏にて六粒を買求め服藥仕候處速かに快癒仕候依て六神丸の効能顯著なるを證明仕候也

石見國邇摩郡宅野村松泉店
二月五日　森山林吉郎

龜田利三郎殿

明治女學校は、今を距る十又四年前、島田三郎、田口卯吉、木村熊二、巖

○内務省外國賣藥御撿査濟（明治廿五年）

清國蘇州正本家誦芬堂調劑

登録商標

虔脩六神丸

定價

一粒入金拾錢　十四粒入金一圓
三粒入金二十五錢　五十粒入金三圓
十粒入金七十五錢　百粒入金五圓

主治効能

◎肺病◎胃病◎腫物一切（即ち癰疔）▲腹癰▲乳岩▲乳癰▲喉癰▲背癰▲對口疔▲小兒瘡毒の類）◎梅毒◎熱病◎赤痢◎虎列拉等に特効あるは明治廿八年流行病蔓延の際實驗し知事山田男爵より賞狀及木盃を賜はる◎子宮◎神經◎心臟病等には特効誓つて保證す

○全國大醫數十名及全國高僧諸氏の證明あり

○貧患者は一寺住職の證明書送附せば特別割引す

大日本發賣本舖
京都市五條通室町西入
龜田利三郎

送金（京都五條郵便局拂渡爲替○郵券代用一割增
○郵税一包四錢○二包以上一包毎に二錢增

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治女學校義捐金募集告白

明治女學校は、今を距る十又四年前、島田三郎、田口卯吉、木村熊二、巖本善治等が、發起創立せしものなり。時に、民間未だ私設獨行の女學校あるなく、但だ外國傳道會社の管理に係るものありしのみ。同志切りに之を遺憾とし、深く國躰に基づき、兼て日進文化の學術に適應せる、私立の女學校あらんことを熱望し、大隈伯、澁澤榮一君、其他、朝野諸名士の協贊を得て、創建せり。爾來、十四年、孜々、育英に盡力し、前後、入門生、一千五百名に超ゆ。此を以て、精神次第に貫徹し、校友四方に起り、將に擴張の機を決して天下に請ふ所あらんとする時、圖らざりき、去々年二月、隣家火を失し、校舍悉皆類燒に罹り、十年の苦心、一朝烏有に歸せり。於此乎、天下同情の士、呼ばずして應じ、奮つて義捐寄捨せらるるもの、太はだ多し、就中、紡績會社數百の工女、相約して、其賃金の貯蓄を寄附せらるるあり。有志婦人、四方に訴へて、一大慈善市を開かるるあり。甚しきは、結髮を廢して、其資を寄せらるるもの、若くは、食を斷つて、汗血の喜捨を寄せらるるものあり、感慨眞とに禁じがたし。如斯して、合計金六千圓を得、外に、勝海舟先生の武道道場、大隈伯の鐘樓、アリスミラー孃の外國敎師館、ハーツフホルン孃發起紀念館、鈴木眞一氏の敎場一室、文學音樂會の音樂敎場一室、中川嘉兵衞氏の默想室、等の建築預約を得たり。此に於て、災後一周年を期とし、東京府下北豐島郡巣鴨村に、校地五千六百坪、建家(二階造西洋館及日本家)一百二十坪を得たり。偏へに是れ、天下仁人非常の慈恵による。今にして、吾校は、舊に劣らざるの隆盛を復するを得たる也。

因て熟ら思ふに、今の時は、則ち昔時に異る。各府縣高等女學校新たに起り、四方到る處に、女子の普通敎育あり。形勢毫も十四年前の寂寥たるに似ず。蓋し、女子普通敎育の器關は、略ぼ具備せりと云ふべし。夫れ、明治女學校の初て起り、爾來天下仁俠の士の協贊を辱くせる所以のものは、自から特種の趣意あるべし。若し、四方普ねく供給し得る通常容易の盡力にして止まば、必らずや恐る、熱情同感の知己に孤負せん。故に、知る。今や更に一段の難を冒し、當に一歩進向の責務に任ずべき機會に立てりと。

之を以て、明治女學校第二期の敎育方針として、今後將來に盡力すべきは、一に、有限若干名の女生に特種の普通敎育を施すこと、二に、高等敎育の課程を漸次に擴張し、他日女子大學の地位に到達せしめんこと、是れ也。

其一、特種の普通敎育とは、家庭及修己の鍛錬に重きを置くべき普通敎育にして、生徒多數の女學校に於て施こしがたきものなり。其二、高等敎育は、十年前來既に施授したるものなれども、今後更に擴張し、彼の高等女學校卒業後の有志をして、遺憾なく學修せしむべき科程を具へんことを望むにあり。

夫れ此の如き二箇の希望は、今の時に於て尙ほ稀有に屬す。只管らに、仁俠の士の贊助を仰ぐにあらざれば、遂行極めて難し。則ち廣く校友を募り、着々方針を進め、歩々堅實の基礎を置えて、敢て退轉せざるの進歩を了せんことを期す。茲に初て擴張の途に上らんことを決定し、先づ基本金三万圓の義捐を各地方の有志に請はんとする也。仰ぎ願くは、天下博愛義俠の仁士、仔細に吾校多年の精神を吟味せられ、幸に同情を寄せ、惠然として贊助の恩を施こし玉へと云ふ。

明治三十一年二月

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY